高校デビューに失敗した傷心少女の心に催眠を掛けて種付けセックスしてあげました！

ロスコー

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
高校デビューに失敗した傷心少女の心に催眠を掛けて種付けセックスしてあげました！

【Ｎコード】
Ｎ０２４１ＤＤ

【作者名】
ロスコー

【あらすじ】
高校生デビューに失敗して傷心の少女。
夏休みに田舎の親戚宅に心の療養に訪れると、親戚のお兄さんに催眠を掛けられて種付けセックスをされちゃうお話。

自サイト「レメの官能小説」にて掲載中（完結済み）の作品の転載になります。

高校デビューに失敗したＪＫは放課後にオナニー狂い

いよいよ女子校生になった私は、周りのみんなもそうであるように、恋愛や青春の大舞台に上れた気持ちで胸が高鳴っていた。

義務教育の期間が終わり、やたら理不尽な校則と連帯責任に縛り付けられた窮屈な生活から、やっと解放されたというのもある。

でもやっぱり女子校生になれば「恋愛解禁」、「セックス解禁」ってイメージがずっとずっと強い。

異性の男の子と学校帰りに遊んでみたいし、週末はお洒落してデートして……そのうちにエッチなことをしてみたい。

初体験はちょっと痛いって聞くんだけど、初体験を済ませた後は頻繁にエッチするようになったって友達が言っていた。

痛いのは最初だけで、それを過ぎればエッチするのはとても気持ち良いって。

中学生の頃にも何人か経験済みの子がいて、経験済みの子が二人も集まればエッチの経験話は具体的になって、生々しくなって、私は想像しているだけでエッチな気持ちになってしまって、ちょっと濡れた。

未経験で話を聞くことしかできない他の子もそうだったと思う。

みんな恋愛とセックスには興味津々、きっと女子校生になったらすぐに彼氏を見つけて、経験を済ませてしまおうって思っているはず。

いつまでもエッチな話題に参加できなくて、一人だけ取り残されてしまうなんて、誰だって嫌だもの。

私だってそう。

……でも、私は少し遅いくらいが丁度良いかなって、自分のグループ内での立ち位置を考えながら思う。

少し引っ込み思案なところがあって、いつも誰かに背中を押して貰ったり、助けて貰ってる私が、そんな優しい友達を差し置いて先に恋人を見つけて、エッチしたりするのは悪い気がする。

みんなが恋人を見つけた後、まだ恋人がいない私の恋愛相談にみんなが乗ってくれて、告白の後押しをしてくれて、恋人ができたことを一緒に喜んでくれて、そういった流れの中でみんなに感謝の意を込めて、初体験の感想をゆっくり丁寧に話してあげたい。

私はなんでも人任せで、人に頼りっぱなしで、なんでもして貰えるからって調子に乗っているって後ろ指を指されることもあるけど、私はみんなのことが好きだったから、それでも別に構わないんだ。

みんなに可愛がってもらえる自分が好きなんじゃなくて、私のことを可愛がってくれるみんなのことが好きなんだ。

その一点だけを決して間違わなければ、私はきっとまた楽しい学生生活が送れると思っていた。

それは私の処世術みたいなもの。

私を猫可愛がりしてくれるみんなを全力で愛していけば、きっとうまくいく。

信じ切っていた。

思い込んでいた。

それは私が生まれてからずっと私に掛けられていた催眠術のように。

みんなを大切にしなさい――

みんなを愛しなさい――

それが幸せに生きるために必要なことなのだ――

と。

深い深い暗示に掛けられた私は、高校の新しいクラスにもすぐに馴染み、またすぐにみんなに可愛がって貰えた。

身長は小さくて華奢なので小動物のように、天然パーマのもしゃもしゃした髪をいつもみんなに撫で回されて、学校のマスコットのように祭り上げられて。

みんなの顔と名前はすぐに覚えて、誰とでも仲良くなって、誰にでも可愛がられて。

みんなに愛されて、その何倍も私はみんなを愛して大切にして。

先生にも可愛がられ、放課後はみんなに誘われて遊んでまわって、もちろん少しのやっかみなんかはあるけれど、それでも私はみんなを愛して、愛に包まれている気がしていた。

後になって思えば、それは愛の集団催眠みたいなもの。

愛の集団催眠がすっかり解けてしまった後は、あの不思議な熱狂はなんだったのだろうと思わずにはいられない。

一人、電車に揺られて田舎の風景を見ながらその頃を思い出すと、みんながみんな、何かの病魔に魘されて、常軌を逸していたようにしか思えなかった。

今こうして田舎電車の中、つまらなそうに外を眺めている私は印象に薄く、まさか学校ではみんなに可愛がられた人気者だったなんて、誰も夢にも思わないだろう。

クラスの端っこで、友達も少なく、言葉数も少なく、目立たず、影の薄い地味な女の子。

いてもいなくても、誰にも気付いてもらえない存在。

そんな風にしか思われていないと思う。

愛の集団催眠が解けてからというもの、電車に乗ると、痴漢に狙われることがずっと増えた。

今もそう、ちらちら私を盗み見てくる男の人がいる。

これが通学時の満員電車だったら、あの男の人は私の学生スカートの中に手を入れてきたんじゃないかな。

私を気が弱そうで抵抗しなそうな女の子だと侮って近寄ってくる痴漢。

下着の上から恥ずかしいところを撫でてくる。
私が抵抗を示さなければ、男の人の指は下着の端をめくって直接触れてくる――
そんなイメージを浮かべながら田舎電車の中、私は人知れず身体を熱くさせる。

愛の集団催眠が解けてからの変化としてもう一つ、自慰の回数が増えた。
放課後、友達と遊び歩くことがなくなってすぐに帰宅すると、ベッドの上でエッチなことに耽ってしまう。
以前は指弄りだけだったのに、最近は何かを股に挟んで下腹部を擦りつけたくて仕方ない。
こっそりピンクローターを買ったし、もっと別な玩具にも興味が尽きない。
早く彼氏を見つけてセックスしたい。
何もかにも忘れられるようなセックスをして、早く大人の世界に行ってしまいたい。
今の世界には、私の居場所はもうどこにもない。

ある日の放課後のことだった。
私は呼び出された教室に行ってみると、高校になってから知り合った仲の良い女友達に告白された。

「心愛(ここあ)のことが好きになっちゃったんだよね。
……その……そういうのに、抵抗がなかったら……あたしと付き合わない？」

何が起こったのかすぐには理解できなかった。
混乱する私を見て、その子は悲しそうに教室を出て行ってしまって、それっきり。

同性愛なんてまるで考えたことがなかったし、初めての告白だったしで、私はどうしたらいいのかわからなかった。
心の準備もなければ、返答の猶予もなく、弁解の機会も与えられないまま。

「お前さ、誰にでも媚びてんじゃねぇよ。
期待させておいて、可哀想じゃんか！」

翌日、クラスのみんなの前で罵声を浴びたことによって、私に掛かっていた愛の催眠はすっかり解けてしまった気がする。
なんだかうまく笑うこともできなくなった私は、高校生活二ヶ月目にして孤立し、放課後はオナニーばかりの毎日。
そんな私を見かねた両親が、夏休みに親戚のいる田舎町に遊びに行く計画を勝手に立てちゃったからに、私は今、田舎電車に揺られて変質者にチラ見される始末。
つまらないため息を吐く私だったけれど、まさかこんな何も無い田舎町で、親戚のお兄ちゃんに種付けされることになるとは、この時はまるで思ってもいなかった。

親戚の女の子と一緒にお風呂に入っていた頃のエッチな思い出体験の告白

都会の人間は――

それと違って田舎の人間は――

という言い回しで片方を持ち上げ、片方をディスる話を聞いたことは、誰にでもあると思う。

いつのニュースだったか、初雪が降り積もった深夜に道路で寝転がっていたら車に轢かれてしまった人の話を聞いたことがある。

学校でその話になった時、私も含め、みんな爆笑したものだ。

道路に寝転がってたら、それは轢かれて当然だ、なんて馬鹿なんだろうって。

一通り笑いあった後に、クラスの数人が「俺も寝転がってみたいかな」と感想をつぶやいて、またそれを笑われたりしていた。

私は嫌みにならない程度の微笑みを絶やさず、話を聞いているばかりだった。

でも本当のところは、私だって誰もいない新雪の雪原の上にだったら寝転がりたいって気持ちはあったよ。

新雪の降り積もった深夜の道路だって、少し魅力的かもしれない。

たった数センチ雪が積もっただけで大騒ぎの都会っ子が、たった数センチの新雪の上に寝転がって夜空を眺めている姿を見たら、田舎の人はどう思うのだろうか？

軽トラックで轢きに来るのだろうか？

「心愛ちゃん、ごめんね、待たせたね！」

「あ、お久しぶりです、雅人さん」

約束の時間に遅れに遅れてやって来た親戚のお兄さんに挨拶する。
たった数十分の遅れだったけれど、エアコンもない駅の待合室は蒸し風呂のような暑さで、都会っ子の私はすでに下着まで汗まみれだ。
お兄さんの雅人さんは私服姿なのに軽トラック。
これはきっと農作業に夢中になってしまったおじさんやおばさんが慌てて私を迎えに行くように雅人さんに頼んだんだろうなぁと推測する。
正直、猛暑の中、待ち惚けさせられての恨み辛みを晴らしたい気持ちもあったけれど、今はそれどころではない、エアコンの冷たい風が欲しい！

「そ……その窓全開の軽トラック、エアコン効きますよねっ！？」
「ん？　え？　エアコン？
あ、大丈夫大丈夫！　効くよ、そうだよね、暑いよね？　今、キンキンに冷やす！」

雅人さんは慌てて軽トラックの窓を閉める。
スイッチ式じゃなくて、あのぐるぐるハンドル。
ハンドルをぐるぐる回す姿も忌々しいくらいに暑苦しい。

「荷物はさ、後ろに乗っけちゃいな。
大丈夫、風で飛んだりなんかしないし」
「あ、わかりました……」

どれくらい田舎滞在するか決めてもいなかったので、相応の荷物を詰め込んだ鞄はなかなか重くなっていた。
その気になれば軽トラックに積み込むくらいはできたのだけど、人前で全力を出すほど女を捨ててはいない。

「よっ…いしょっ……！」

ちっちゃな掛け声をして頑張ったつもりを演じる。

「あっと、ごめんごめん、俺が積むよ！」

小動物的な可愛らしさを演じてみた。

こんな媚態を晒せば、昔だったら周りの友達が駆けつけて助けてくれて、そして可愛い可愛いと微笑まれていたのに、今の学校生活ではそんなこともうできない。

荷物を持ち上げられなければ、媚びを売るなと罵られ、荷物を持ち上げたら持ち上げたらで怪力女と嗤われるんだ。

八方塞がりなんだから、感情を閉じ込め、全てを淡々と、青春もろとも周囲を灰色に塗り潰した私。

そんなはずなのに、雅人さんの前となると久しぶりに女を演じざるを得ない。

「おっきなバッグだね、ほら、貸して」

「はい……済みません」

「いいんだよ、心愛ちゃんは女の子なんだから」

そんな風に言わないで欲しい。

まさかこんな汗だくなところを雅人さんに見られてしまうなんて最悪だ。

ブラジャーもショーツも汗でびしょびしょ。

背中をつる～っと汗の粒が滑り落ちていく。

田舎じゃ悪目立ちするから地味な服装にしろとお母さんに言われ無地のワンピースにしてきたけど、雅人さんが迎えに来るのを知っていたらお洒落したのに……！

「よし、じゃあ車に乗って。
女の子を乗せるのに軽トラックじゃ悪――」

雅人さんの言葉が途切れた。

「え？」
「あ、ごめん。
早く車に乗っちゃって。
下着、透けてる」
「……っっ！」

慌てて私は下着を両手で隠した。
すでに視線を外してくれていた雅人さんは優しく微笑む。

「大丈夫、どうせ周りには若い人なんて俺くらいしかいないから」
「……ぅぅ」
「うわわ、そんな真っ赤にならないでさ。
ほら、車に乗っちゃいな。
家に行って、すぐ着替えような」

促すように先に軽トラックに乗り込む雅人さんだったけれど、私が赤面したのは汗で透けて下着が見えてしまったためだけではない。
下着が透けているのを指摘された私は、反射的に胸と股間を押さえた。
当然の反応。
だけど正確には、私はまず両手で股間を押さえた。
無意識に、まず隠すべきは女の子の一番エッチな場所だと思ってしまって、そうしてしまった。
それをしっかり雅人さんに見られた。
誤魔化すように片手で胸を隠したのは数瞬遅れてのことだったけ

ど、たったの数瞬の遅れで晒してしまった痴態に、私はひどく赤面してしまっていた。
平静を装って軽トラックに乗る。
でも心臓はドキドキしっぱなし。
だって私が小学校四年生の頃まで、私と雅人さんは一緒にお風呂に入っていたんだから。
私が小学四年生で、雅人さんが中学一年生になって。
いつものように一緒にお風呂に入るものだと思っていた私だったけど、雅人さんは無理だ無理だと言って大慌てして、それを両親達にからかわれていたのを思い出す。

「心愛ちゃんだって、もう女の子なんだから！」

と雅人さんが両親に向かって声を荒げていたのが印象的だった。
強く記憶に残っている場面なのだから、そこで私も女を自覚すれば良かったのに、小学四年生、五年生となって雅人さんに避けられている気がした私は、小学六年生になって雅人さんの部屋に乗り込んだ。

「一緒にお風呂入ろうよ！」
「いやいやいやダメだって！　もうそんな歳じゃないからっ！」
「んぅっ！　私は気にしないよっ！」
「俺は気にするんだって！」
「なんでお兄ちゃんが恥ずかしがってるのっ？　私は全然恥ずかしくないよ？」
「なんで恥ずかしくないのさ！？　男に裸見られて平気なのか？」
「別にお兄ちゃんにだったら見られても平気だもん」

エッチなところもずっと見られてきたし、雅人さんのだって私は見てきたのだから、全然恥ずかしくないつもりだった。

それになにより大好きなお兄ちゃんに避けられているのが嫌で、意固地になってしまっていたところは十二分にあったと思う。

一緒にお風呂に入る入らないで言い争っているうちに、どう話が転んだかして、私は雅人さんの部屋の中で、下着を脱いでエッチなところを見せることになってしまった。

「恥ずかしくないって言うなら見せてみろ！」

「わかったもん、見せてあげる！　ちゃんと見てよ！　絶対に目を離しちゃダメだからね！　恥ずかしくないって教えてあげるんだから！」

そういう意地の張り合いがあったものだから、雅人さんも顔を近づけて凝視してくれたものだ。

どんどん顔を近づけてくれる雅人さん。

吐息が触れる距離。

エッチな場所の柔らかい部分を左右に開いて奥を覗き込む雅人さんの、熱にぼぅっとした顔を見たとき、たぶんその瞬間、私は女の自覚が芽生えたんだと思う。

性器を見られることなんて何でも無いと思っていたのに、今まで感じたことのない強い動悸に襲われた。

体中が熱くなり、顔が真っ赤になる。

そしてエッチな場所がじんじん疼いた。

「っ！」

なんだか怖くなって私は腰を引いてしまった。

見られている恥ずかしさなんかよりも、初めての自分の身体の反応に怖くなってしまってだったけど、それでも私と雅人さんの意地の張り合いは私の負けだった。

意地の張り合いに完敗した私は、ほのかに初恋を意識していた。

小学六年生の頃と今とでも私は身体付きもなにも変わらないまま、雅人さんを意識してエッチなところがジュクジュク蕩ける。

軽トラックを運転する雅人さんはすっかり大人びて、逞しく、いい男になっていて……私はうっとり見とれてしまう。

でも、私たちは血の繋がりのある者同士――

背徳感に酔い痴れる――なんていう言い回しを初めて目にしたのは、男性と男性の恋愛と肉欲を描いたボーイズラブ小説を読んだ時だったろうか。

一人の男性が思いがけず幼なじみの男友達に慕情を抱いてしまい、長年隠し続けてきたその想いを抑えきれなくなり、同性を愛するいばらの道に突き進んでしまう。

また親友と思っていた男友達から想いを打ち明けられた男性も、それを禁断の恋と認識しつつ、大切な親友を恋人として受け入れるかどうするかで迷いながら、ある時、親友を受け入れてしまった際の自分の身体の反応に戸惑い、そしてやがて溺れていく。

そんなエッチな本を本棚の奥に隠しつつ、こっそり読むのも背徳感。

本を読みながら、子供の頃に母親に禁じられていた性器弄りに興じるのも背徳感。

背徳感とはどうしてこんなにも私の心をドキドキさせるのだろう。

雅人さんの運転する軽トラックに乗せられて親戚宅に着いた私は、親戚のおじさんとおばさんに挨拶を済ませると、すっかり汗まみれな身体を洗うために湯を沸かしてもらい、湯船に浸かっている。

おじさんとおばさんはやっぱり農作業が忙しいらしく、そんな繁忙期に訪れたことを詫びさせてもらった。

じゃあ後で手伝ってもらおうかな、と柔和に微笑むおばさんは、日焼け止めクリームや虫除けスプレーが必要よね？　と話を切り出し、その他必要な日用品の買い出しに雅人さんを同行させると提言した。

私の荷物を部屋に運んだりしてくれて汗を掻いているのに、雅人さんは私に気を遣ってお風呂に湯を張ってくれていた。

「いいよ、心愛ちゃんに付き合うよ。
でもその前にお風呂に入って着替えちゃいなよ、汗掻いたろ?」

するとおばさんも言うのだ。

「雅人、あんたも汗流してから行きなさいよ。
汗臭くしてたら心愛ちゃんに嫌われちゃうよ?」
「……わかったよ。
でも一番風呂は心愛ちゃんに譲るよ」
「当たり前だろ?
誰があんたの入った後の風呂になんか入るもんか」

そう言っておばさん、おじさんは笑う。
相変わらず弄られポジションの雅人さんが困った顔して、こんな家でごめんね、と力なく微笑む。
私も笑みを返す。

「それじゃあ先にお風呂頂きますね。
雅人さん、私の後でごめんなさいね」

と言って一番風呂を頂いた私は、まだ太陽が元気に照りつけている時間帯だというのに、湯船の中でオナニーに耽っていた。
もう性器弄りが止まらなかった。
二度目の絶頂がすぐそこだった。
私の入った湯船に、この後、雅人さんも浸かるのだと思うと興奮が止まらない。
温かいお湯の中、乳首が痛いくらいに勃ちあがって、溢れ出た瞬

間から湯船に溶け込んでしまう愛液は、もうどれくらい溢れたのだろう？

いつものようにクリトリスや膣の浅瀬を弄るだけでなく、膣を広げて膣内にお湯を入れて、そのまま立ち上がるとおしっこのようにお湯が滴って、それがまた湯船に溶け込む。

どんどん私のエッチ汁に染められていく湯船。

この後、私がこんなことをしていたとも知らずに雅人さんがこの湯船に浸かるのだと想像すると興奮する。

今、女の子の大切な場所から滴っているのはおしっこじゃなくてただのお湯。

だけど私の大切なエッチな場所をすすいだ特別のお湯。

下腹部に力を入れると、お湯が勢いよく飛び出す。

本当におしっこをしているみたい。

でも違う。

これはおしっこじゃなくて愛液と混じっただけのただのお湯。

すごく悪いことをしている気がする。

雅人さんを騙している気がする。

そう思えば思うほど、どんどん濡れてきてしまう。

また湯船に浸かり、エッチ汁を掻き出すように性器を弄る。

「……ぃ…イクッ…ぅ！」

親戚の家で、こんな昼間から、次に雅人さんが湯に浸かるのに……。

ゾクゾクっと背徳感が背筋を駆け上がり、私は三度目の絶頂を目指して性器を弄る。

どんどん濡れる。

エッチ汁が止まらない。

ただの透明なはずの湯が、不思議な魔力を帯びていくように感じ

る。

二月十四日・バレンタインデーに好きな人に手作りチョコレートをあげる話に女の子は誰しも夢中になる。

チョコレートの作り方が書かれた本を読んで、可愛いラッピングの仕方を教えて貰ったりして、大好きな人のことを考えながら市販のチョコレートを湯煎にかけてトロトロに溶かしていく。

鍋底で焦げ付かないようにチョコレートを掻き混ぜるように、同じように膣の中を掻き混ぜながら愛液を吐く私は、『手作りチョコレートで両想いになれるおまじない』なんて小冊子を思い出していた。

湯煎で溶かしたチョコレートの中に、たとえば血を入れたりする。髪の毛を一緒に結った手編みのマフラーと同じで、チョコレートの中に自分の体液を混ぜようという話だ。

他にも唾液、涙、刻んだ爪や髪の毛など。

でも小冊子の終わりには、こうも書かれていた。

おまじないの効力を最大限に高めたいなら、チョコレートに混ぜる血は生理の時の経血を、刻んで入れるのは髪の毛ではなく陰毛を、と。

後になって思えば馬鹿馬鹿しい話だし、これを男子が聞いていたらどん引きものだろう。

でもバレンタインデーが近づくと、女子小学生は集団催眠に掛かったようになって、そんなおまじないも真に受けて、生理周期に合わせてチョコレート制作を行ったりする子も現れたりする。

私はどうだったかというと、本当のところチョコレートを作ったこともないし、渡したこともない。

生理が始まったのは中学生になってからだったし、それになにより、私みたいな小柄で華奢で、それに天然パーマな髪をしていると、男の子にはほとんど相手にされなかった。

男の子は黒髪ストレートで白のワンピースを着た女の子なんかに

憧れると聞くけれど、そんな純粋無垢を謳ったような子なんていたりするものか。

女の子はこんなにもエッチな生き物なんだから……！

そう胸の中で叫びながら、私は自分の痴態を肯定するように指使いを激しくして三度目の絶頂に達する。

湯船の中でビクビク震える。

この後、私のエッチ汁に染まった湯船に浸かる雅人さんを想う。

あの力強く逞しい身体に私の体液が染み入っていくのだと思うと、それだけで幸福感が込み上げてくる。

けれども同時に切なさも込み上げてくる。

雅人さんに抱かれたい。

雅人さんに滅茶苦茶にされたい。

私は湯煎で溶かされたチョコレートのようになって、雅人さんの体液を、精液をその中に溶かし込んで欲しい。

思えば思うほど、どんどんお股から愛液が溶け出していく。

私と雅人さんは親戚同士、血の繋がりのある者同士で、決して結ばれてはいけない間柄。

そんなことは昔から知っている。

言われるまでもなく禁じられた初恋。

でも好きになってしまったものは仕方ないじゃないか。

怒りに任せて性器を虐めていると、怒りは快楽の麻薬を受けて背徳感に昇華されていく。

「雅人さんっ、雅人さんっっ！」

何度も禁じられた相手の名前を呼びながら私は絶頂する。

愛液を吐き出しすぎたためか、いよいよ喉が渇いて辛くなって、ようやく私は風呂を上がった。

涼しい扇風機の風を感じながら、冷たいペットボトルの水をがぶ飲みする。

生き返る――と感動するほど水が美味しく感じる。
それだけ大量に愛液を吐いたということなのだろうか。

お風呂場に入っていく雅人さん。
脱衣場の戸が閉められた向こうで、雅人さんが私の愛液入りの湯船に浸かっているのだと思うと胸がトクトク鳴る。
本命のバレンタインデーチョコレートを渡した後の女の子の気持ちって、こんな感じなのかなと私は思いつつ、1．5リットルのペットボトルの中身を大半飲み干してしまった。

私の愛液がたっぷり溶け込んだお風呂から上がってきた雅人さんは、ほんのり顔を赤らめているように見えた。
おじさんとおばさんは農作業に戻ってしまい、今、家にいるのは私と雅人さんの二人だけ。
湯上がりの雅人さんはテーブルを挟んで私の向かい側に座ると、ペットボトルの水を飲みながら、暑いね～と団扇を仰ぐ。

「こんな時間に風呂に入るなんてね」

雅人さんは朗らかに微笑む。
私も微笑みを返しながら、言ってみる。

「お風呂、私の後で……ごめんなさい」
「いやいや、そんなことで気を遣わないでよ、もっと気楽に、ね」
「そう……ですか」
「うん、のんびり行こうや」

私は雅人さんが私の愛液風呂に入ってくれたことを意識して意識して仕方ないのに、雅人さんは全く何も思ってくれていない。
そのことに少し裏切られた気がするものの、でも私と雅人さんは兄妹のように育てられて、一緒にお風呂に入ったり、性器を見せ合ったりしてきた仲なのだから、今更私の入った後のお風呂で興奮して欲しいというのは、私の一方的すぎる想いだろうか。
私なんかはすでに雅人さんの身体にエッチな場所を擦りつけたような気でいるのに。

「もう心愛ちゃんも女子校生か。
なんかあっという間って感じだ」
「雅人さんだって大学生になられて、もう車を運転されて、すっかり大人って感じ。
私なんて小学六年生の頃から全然変わってないですよ？」

小学校六年生の時に裸を、性器を見せた頃から何も変わってないですよ、という含み。
私の性器をじっくり見たことを思い出して、そのことで私を意識して欲しい。
言葉に陰影を付けて、恥じらう女の表情をして、雅人さんの心に語りかける。
心を誘導するように、雅人さんに暗示を掛けるように。

「少しくらいは身長伸びたんじゃない？」
「……」
「おっと、ごめんごめん。
身長のことは気にしてたのかな……」

別に身長が小さいことを気にしていたわけではないけれど、雅人さんの言動にちょっとイラッとしたのは本当だ。
そしてそれがすぐに顔に出てしまった。
私は感情がすぐに顔や仕草に出てしまう。
皮膚がとっても薄くて、感情が薄皮一枚の向こうにすぐに見えてしまうのだろう。
嘘が吐けない聖人君子ではなく、すぐにバレてしまうから嘘が吐けないタイプ。
だから心に素直に生きるしかないないのに、反面であんたは騙されやすいから気をつけなさいよとよく注意もされる。

どうしたらいいのだろう？
どうしたらいいですか、雅人さん？
もうこの時から、私は心の指針を雅人さんに預けてしまっていた気がする。

「変わってないなんてことはないよ。
心愛ちゃん、とっても可愛くなったよ。
髪伸ばしたんだね、ふわっとした髪型、とても似合ってるよ」
「っ！？」

急に褒められてしまって、顔が真っ赤になるのが自分でもわかる。
赤面するのを見られてなお恥ずかしく、頭にどんどん血が上り、思考が混乱して、なんだか涙までにじんでしまって。

「え、あ、ごめんっ！
そんな驚かれるとは思ってなかったから。
でも嘘じゃないよ、とっても可愛くなったと思うよ？
ん、あれ、前から心愛ちゃんは可愛いんだけどもね、えと……」

私が赤面して取り乱したのを受けて、雅人さんも慌てふためく。
雅人さんは早口で続ける。

「ほら心愛ちゃんが小六の時にさ、一緒に夏祭りに行っただろ？
それを中学の友達に見られててね、後から質問攻めだったんだよ。
あの女の子は誰だって。
あの勢いは凄かったよ。
親戚の子だって説明したら、今度は紹介してくれって詰め寄られて。
そうそう、一緒にお風呂に入ったりしてたって教えたら羨ましがられてね。

ちょっとした優越感？　そういうのを感じたよ。
今だってそう。
心愛ちゃんの後のお風呂だよ、もうさ……」

勢い余って口を滑らせた感じの雅人さん。
私は赤面がひどくて、涙ぐんでしまっている状態の顔なのに、それでも今この時の雅人さんの表情を凝視せずにはいられなかった。

「あ……
ごめん、セクハラ発言だったね……」

顔を赤らめ、気まずく顔を伏せた雅人さん。
私もなんて言葉を掛けていいのかわからなくて、沈黙が訪れた。
蝉の鳴き声と、農作業車の音が聞こえるばかり。
雅人さんの失言について私は何か言ってあげなくてはならない立場なのに、雅人さんが私の後のお風呂であることを意識してくれていた事実に、もう頭が一杯だった。
私の中の「女」の部分は焦れていた。
男を受け入れる側として、準備が整ってしまっていた。

私と雅人さんはテーブルを挟んで、互いに視線をあっちへこっちへ泳がせてばかりだった。
お互いを変に意識して顔を赤らめて、どんな話題を切り出していいのかわからないでいる。
まるで初デートで躓いてる初々しい恋人のよう。
気まずいはずなのに、私は染み出る幸福感を味わっていた。

「……」
「……」
「こ、心愛ちゃん、今から買い出しに行くにしても、まず……部屋

を見ないとさ……」
「……ぇ？　部屋？」
「部屋を見てからじゃないと……何を買ったらいいか……わからない、よね？」
「あ、ぁ……そうですよね……」
部屋、という言葉を最大限意識してしまって私の声は裏返っていた。

「じゃあ……部屋……行こうか」
「……はい」

雅人さんが立ち上がる。
その後をついて私も立ち上がる。
いよいよな展開に心臓が飛び出しそうなのを堪えながら、私は雅人さんの後を追って階段を上る。
普段は口数の多い雅人さんもすっかり黙り込んでしまい、その横顔は赤い。
階段を上り、廊下の突き当たりの客間に通される。

「こっちに滞在中は、この部屋が心愛ちゃんの部屋だから……」

部屋の扉を開けてくれた雅人さんは、私に先に部屋に入るように促してくれる。
雅人さんの横を通り過ぎて部屋に入ってしまえば、部屋に出入りできる扉は雅人さんに抑えられてしまうのだから、もう逃げ場はない。
初めてのエッチがもうすぐ目の前に迫っている。
処女を喪失する瞬間がもうそこまで迫ってきている。
大好きな雅人さんに抱いて貰える、待ち焦がれた瞬間が、いよい

よ目前に……！

私は部屋に足を踏み入れた。

自傷行為のような激しい角オナニーをするほどの性欲に溺れる女の子

「……」

雅人さんに連れられて足を踏み入れた部屋。

そこは客間として使われている部屋で、両親と泊まりに来るといつも使わせてもらっていた部屋だ。

お父さんとお母さんと私の三人分の布団を並べるのが精一杯な広さで、子供ながらに狭いなぁと思っていた部屋だ。

だが今夏は私一人での滞在。

私一人分の布団が敷かれているだけで、他にはこれといって何もない状態だった。

開け放たれた窓の向こうには田園風景と青空が広がり、レースカーテンがはためいている。

その窓の向こうからは農作業車の忙しそうな稼働音が聞こえ、蝉の鳴き声と共に騒がしい。

畳敷きの部屋には蚊取り線香の独特の香りが染みついていて、なんとも牧歌的だった。

「……と、とりあえず、この部屋を使って貰うつもりだよ……」

「……あ、ありがとうございます」

「いろいろ必要だよね、何もなさすぎだったね」

物品に乏しいのは良いとしても、なんだろう、初めてのエッチをする場所として、それらしい雰囲気がもう少し欲しかった。

なにも高級ホテルの最上階で夜景を見下ろしながらなんて贅沢は

言わないけれど、格安ラブホテルにも劣るこの部屋に、華の女子校生が処女を散らすに相応しい雰囲気と色気があるかと問われると、素直に頷くのは難しい気がする。

もちろん、処女の私はラブホテルに入ったこともないけれど。

「雅人さんの部屋……」

「え？」

「雅人さんの部屋も二階でしたよね？」

「あぁそうだよ、廊下の向こう端……俺の部屋、覗いてみる？」

「は、はいっ」

そうだ、雅人さんの部屋があったじゃないか。

私は妙案を思いついた瞬間のように気持ちが跳ねた。

雅人さんの部屋には何度もお邪魔させてもらっているから初めての男の人の部屋ってわけではないけれど、好きな男の人の匂いが染みついた部屋と、その布団の上で好きな人に抱かれるというのは女の浪漫をくすぐってくれる。

再び雅人さんが案内してくれる形で廊下を歩む。

中学、高校とも部活ではサッカー部だったという雅人さんの背中は、家庭科部で粉物を焼いたりしていた私なんかと比べるまでもなく、広く、大きい。

あぁ……心臓の鼓動が落ち着かない。

喉がカラカラに渇く。

今日これから雅人さんに抱かれて初体験を終えたとしても、私の田舎滞在はしばらく続く予定だ。

たとえ私と雅人さんが近親者だとしても、男と女、超えてはならない一線を越えてしまったら、もう誰にも止めることができないほどに燃え上がってしまうのではないだろうか。

今日の初エッチを終えた後、雅人さんだってヤりたい盛りだろう

から、明日にもすぐまた求めてくるかもしれない。
破瓜した翌日だから痛いかもしれないけど、雅人さんに求められたら私は拒むつもりはない。
ううん、今日の夜から雅人さんに求められる可能性があり続けることになるんだ。
俗に言う夜這いというやつだ。
なんて幸福なことだろう。
夏休みに入ってすぐの田舎滞在、その初日から雅人さんと初エッチ。
田舎は遊ぶところがないからエッチばかりしているって聞いたことがあるけれど、それならそれで構わない。
今年の夏は雅人さんとのエッチに明け暮れたい。
近親者の垣根を超えて、ただひたすらに、肉欲のままに、交わり続けたい。
そして孕みたい。
雅人さんの子供を身籠もって、雅人さんの奥さんになりたい。
子供を産んで、家庭に入って、いい奥さんを一生努めていきたい。
もうそれだけでいい。
本当に雅人さんの子供を妊娠してしまったら、私の人生はどうなってしまうのかわからない。
わからないけれど、夏休みが終わって都会に戻って、また学校に通ってという日常から脱出するにはこれしかない。
脱出？
違う、私はそれまでの日常を破壊したいんだ。
しっかりと自覚がある。
明確な破壊衝動を私は抱えてしまっている。
学校生活で躓いてからというもの、オナニーの回数が飛躍的に増えたけれど、それは現実逃避のために快感を貪っていたのではない。
机の角や棚の角、とにかく固くて鋭利に尖った角ならなんでもいい、私は私のエッチな場所を擦りつけてきた。

それもけっこう力強く。
後先考えない無謀な力加減。
行為の後にエッチな場所が赤くなるのは当然で、汗疹や水膨れができてしまうこともあった。
私が抱えた破壊衝動は性衝動と絡み合って、激しい自慰を私に強制していた。
精神科医に言わせれば私の自慰はリストカットのような自傷行為に数えられるのかもしれない。
私が壊したいものはなんだろう。
蹴躓いた学校生活？　つまらない自分自身？
わからないけれど、その両方をいっぺんに壊すためにだったら、まだまだ子供と呼ばれる齢だけれど、この身に新しい命を宿すことだって厭わない。
雅人さんの後ろを歩きながら、私はそんなことを考え続けていた。
雅人さんのその広い背中に寄り縋りたい。
今にも粉々になりそうなちっぽけな私を受け止めて欲しい。
子宮と卵巣が雌の本能に目覚めて強く疼く。
さっきお風呂で代えたばかりの下着が、もう意味をなさないほどに濡れてしまっている。

「散らかってるけど……どうぞ」
「……お邪魔、します」

そうして雅人さんの部屋に入った私は、しかし見知っていたはずの雅人さんの部屋の変貌ぶりにエッチな気分のスイッチが切れかかってしまった。

「……あぁ、雅人さん、工学部でしたよね」
「そう。
昔っから機械弄りとか好きだったしね。

今はオーディオを弄るのが好きでさ……部屋もこんな感じなんだ」

机や本棚やベッドの位置は昔のままだったけれど、部屋の左右の角に大きなスピーカーがあり、そこから伸びた太いケーブルがいくつかの厳かな機材に接続されている。

詳しくはわからないけれど、スピーカーを鳴らすためにこんなに多くの機材を何本ものケーブルで繋いだりしなくてはならないのだろうか。

ケーブル一本一本まで固定に神経が尖らせてあるようで、そのオーディオシステム全体はマニアックなプラレール模型のように見えた。

「心愛ちゃんはこういうのには興味は……ないよね？」

「……周りは畑だから、遠慮なく大きな音が出せますよね」

いつの間にかオタク壺に変貌していた雅人さんの部屋、ここで初エッチなんてどうなんだろう？

濡れ雑巾のように濡れた下着が、今になって妙に冷たく感じる。

「心愛ちゃんが小学校時にさ、この部屋でエッチなことしたよね？」

「え？　えっっ！？　そんな……いきなり……なんで……」

雅人さんは私の狼狽なんか気にせずに話を続けた。

そうされると、心が見透かされている気分だった。

「あの時は心愛ちゃんのアソコを見せてもらっただけで、得したのは俺だけだったから。

そのお礼にさ、心愛ちゃんに聴かせたいものがあるんだ」

「……聴かせたいもの？」

「うん、エッチな気分になれる音楽みたいなものなんだ」

「エッチ……ですか？」

雅人さんが私の顔を覗いてくる。

平静を装おうつもりで取り乱す私と違って、雅人さんは静かな湖面のように落ち着いている。

エッチな話をしているというのに、雅人さんの落ち着きようはなんだろう。

とっくに雅人さんはエッチなスイッチが入っていたと言わんばかり。

そして心愛ちゃんもスイッチが入っているんだろう？　と問い掛けるような、スイッチを入れなよと促してくるかのような表情。

その表情を見ていると、私がお風呂でエッチなことをしていたことに雅人さんは気付いているんじゃないかと不安になってきてしまう。

いや、きっと気付かれているんじゃないだろうか。

あの小学校六年生の夜、性器を見せた時のような怪しげな雰囲気が部屋に再来する。

「……どうすれば、いいんですか？」

性欲に思考が蕩け出した私は、愛液が滲むような自然さで、そう訊いていた。

「うん、そこのベッドに横なって寝てごらん。

そしてこのヘッドフォンを被ってもらう」

小学生の私がスカートの中から下着を下ろし、片足ずつ下着から脚を抜いたように、片足ずつベッドに上がっていく。

そうして雅人さんのベッドに横になる。

「そう。
仰向けになって、両手を左右にだらんと伸ばして、両脚は肩幅ほどに開いた方がいいかな。
さぁ目をつぶって。
身体の力を抜いて、一番リラックスできる姿勢になってごらん」

一番リラックスできる姿勢？
なんだろう、そう言われて思い出すのは雅人さんの前でスカートをたくし上げた姿勢なんだけれど。
ベッドに横になりながらその姿勢を取ってみる。
やっぱりこの姿勢が一番落ち着く。
でも重力に引っ張られた両腕が重いので、重力に任せて倒してしまう。

「うん、良い姿勢だね」

どうしよう。
このスカートをたくし上げた姿勢を褒められただけで、これ以上無いエッチな気分になっちゃっているのに……
下着が気持ち悪いくらい濡れている。

エッチな気分になれる催眠へ誘う導入催眠。すでに女の子は濡れ濡れで

雅人さんのベッドに横になると、大好きな雅人さんの匂いが私を包み込んだ。

エアコンを効かせてくれたので部屋はだいぶ涼しい。

家の周囲は田園が広がっているものの、やはりオーディオを大音量で鳴らすので窓は二重サッシにして防音されているらしく、農作業車の音や蝉の声なんかは全く聞こえてこない。

「カーテン閉めるよ」

私の仮住まいの部屋にあるような薄いカーテンではなく分厚いカーテン。

やはり防音性や遮光率を求めた特別なカーテンなのだろう、夏の強い日差しを完全に遮って部屋は暗室のように真っ暗になった。

その真っ暗闇の中、真空管と思われる大きな電球のようなものが、夕焼けを蜂蜜に沈めたような琥珀色で照っていた。

なんだか濃厚に甘そうで、でもとても優しそうな色味。

まぶたを閉じた視界の向こうでも、いつまでもトロッと浮かんでいる私だけの夕日のようだった。

「心愛ちゃん、目を閉じたままでゆっくり深呼吸をしてみようか。

腹式呼吸、お腹の底まで空気を運んであげるように意識して、ゆっくり息を吸って。

そう……ゆっくり」

雅人さんの声もトロッと耳朶に絡んでくるような気がする。

今から何が行われるのか全然わからないけれど、きっと未来の旦那様である雅人さんに逆らうことなんかできずに私はゆっくり息を吸う。

「今度は息を吐くよ……。
息を吸った時よりも、もっともっとゆっくりと。
いいんだよ、たっぷり時間をかけて。
俺を焦らすように、ゆっくりと、お腹の底から全部の空気を吐き出してしまおう」

雅人さんを焦らすように――と言われても、焦れているのは私の方なのに。
エッチな気分になれると言われてベッドに横になったけれど、とっくにエッチな気分になっているんですよと告白してしまいたい気分。
でも、吸って吐いての一呼吸を終えてみると、なんの変哲もない深呼吸なのに、身体の力が心地よく抜けていく感じがあって、それは新鮮な驚きだった。

「もう一度やるよ？
鼻からゆっくり息を吸おうね、ゆっくり、そう……ゆっくり。
吐くときは口から。
ゆっくり、ゆっくり……息を吐く度にリラックスしていこう」

もう一度深呼吸する。
時間を贅沢に使った長い深呼吸。
小学生、中学生と成長していくにつれて、時間が経つのが早くなってしまったような気がする。
でもこうして雅人さんの住む懐かしい田舎町を訪れ、まだ夏休みに入ったばかりであることを思い出すと、幼い頃のように時間が無

限に感じられた感覚が蘇ってくるようだった。
たっぷりと時間を掛けて深呼吸する。
粘度の高い蜂蜜がスプーンの先からゆっくりと滴り落ちて、私のお腹の中に入ってくるような感覚。

「すごい……。
私、呼吸しているだけなのに、すごく気分が楽に感じられるの」
「深呼吸するとリラックスできるから。
……心愛ちゃんは新しい学校に入ったばかりで、まだ学校生活に慣れてなくて、とても疲れちゃっているんじゃないかな。
人はストレスを感じると呼吸が浅くなるらしいから。
受験勉強をして、受験本番があって、そして新しい学校生活が始まって……心愛ちゃんはそれが長く続いていたのかもしれないね」

そう言うと雅人さんはベッドで仰向けに寝ている私のお腹の上に手を載せた。

「はぅ……っ」
「俺の手をお腹に載せただけ。
なにも驚かなくていい。
俺の手の重みを感じて。
俺の手の重みを感じながら、またゆっくり深呼吸しよう。
ゆっくり息を吸って、俺の手を持ち上げるように。
そして俺の手の重さに負けないようにゆっくり息を吐いて」

雅人さんに触れられていることを意識すると、せっかく深くなっていた呼吸が突如として浅くなる。
呼吸の深い、浅いとはこういうことなんだなと改めて思いながら、臍の上に載った雅人さんの手の重みを感じる。
重さを感じながら深く呼吸していく。

「よしよし、良い子だ。
深い呼吸を繰り返していこう。
リラックスしていこう。
リラックスするのは……気持ちいいだろう？」
「はい」
「心愛ちゃん、よく聞いて」
「……？」
「もう心愛ちゃんは返事をしなくていい。
俺の言葉をだけを聞いていてくれればいい」

俺の言葉だけを聞けと雅人さんに言われるのは、なんだか心臓が高鳴ってしまう。
あ、ダメだダメだ、また呼吸が浅くなる。
ゆっくり、ゆっくり深呼吸をするんだ。
するとお腹の上に載せられていた雅人さんの手がゆっくりと動き出した。
私の臍を中心にして円を描くように。
右回転。
指の先だけが触れている程度の優しさで、山奥の湖面を歩くかのように。
蜂蜜の瓶をスプーンで掻き混ぜるように。

「不思議な感覚だろう？
続けていくうちに、俺の手に触られている感覚が無くなっていくよ。
お腹を心地よく撫でられている感覚だけになる。
俺の手が溶けて心愛ちゃんの中に消えていく感じ」

何度も臍周りを撫でられるのを往復されると、一度撫でられた感

覚の上に次の感覚が塗り重ねられ、どんどん厚みを増していく。
そうしているうちに撫でられている感覚だけになっていき、雅人さんの手の感触が消える。
ふっと消えてしまった瞬間、雅人さんの手が私の中に溶け込んでしまったかのようにも感じる。
溶け込んで来た雅人さんの手はどこへ？

「……ぅ」

エッチな方向に意識が向いてしまう。
そんなことあり得ないのに、雅人さんに直接、子宮や卵巣を触られている感覚。
雌の本能が声なき声で繁殖欲求を叫んでいる。
思わず背筋に力が入り、下腹部が疼いて堪らない。

「んんっ……！」
「ほぅら、喋っちゃダメだよ」
「で……でも……」
「……まだ、ちょっと難しいかな」

そんなことはない。
雅人さんの手の感覚は確かに消えて、私の中にトロッと溶け込んで来ていた。
不思議な感覚。
初めの感覚。
けれど、そこまでされたなら、もっと……！　もっと……！　と私は焦れてしまう。
たった一枚の服が私と雅人さんの間に入っているのだって嫌だ。
直接、雅人さんに触って欲しい。
そうするためには、この邪魔な服をどけなくちゃならない……！

「雅人さん……あのぅ」
「ん？」
「直接……お腹撫でて欲しいの……」

私はワンピースの裾をたくし上げた。
小学校六年生の時、雅人さんに性器を見せてあげた時のようにワンピースをめくり上げ、いやその時よりももっとめくり上げて、おへそ周りを露出させる。

「……っ」

雅人さんが息を呑む。
小学校の時とは違って下着を履いてはいるものの、その下着はぐっしょり濡れている。
それを見られて恥ずかしい思いはあるけれど、雅人さんになら見られても構わない。そんな思いも蘇ってくる。

「いいの？　心愛ちゃん」
「……いいです」
「わかった。
でも心愛ちゃん、これからは声を出しちゃダメだよ？
約束だよ」
「……はい」
「よし、良い子だ」

性器を見せたことはお父さんやお母さん達には内緒だよ、秘密だよ、と約束を交わした時のように、私は言葉を発することを禁じられる。
再び雅人さんの手がお腹に載る。

直接、肌と肌が触れあう。
また撫で回されていくうちに雅人さんの手の感覚が消えていき、私の中に溶け込んでくる。
その感覚はさっきよりもずっと強い。
子宮や卵巣が雅人さんに触られて、喜びむせび泣くように愛液が滴る。
すでに下着を見られていると思えば恥じらいが消え、肩幅に開いた両脚の間からエッチな汁が止まらない。
深呼吸を繰り返し、リラックスしているのに身体は発情していた。
雅人さんがすぐ傍にいるというのに、私は恥じらいなく色情に酔っていた。

「真空管も温まったみたいだし、これからが本番だよ、心愛ちゃん」

エッチなところがとろとろに蕩けている私の頭に、何か企てのある雅人さんはヘッドフォンを被せるのだった。

マインドコントロールされていく女の子

すっかりエッチの準備が完了している私の頭に被せられたヘッドフォン。

分厚い耳当てと、ずっしりとした重厚感。

電気機器の目利きができるわけではないけれど、とても値段の高そうなヘッドフォンだなと感じる。

ヘッドフォンに耳が覆われた瞬間に、周囲の音がスパッと切り落とされて無音の世界がどこまでも広く、大草原のように、大海原のように、とにかく開放的に広がった。

小型音楽機器にあるようなノイズキャンセリング機能とはまるで違う。

あちらが誰もいない教室だとすれば、雅人さんのヘッドフォンがもたらす静寂は誰もいない校庭や砂浜だった。

すると私の胸がチクりと痛んだ。

静寂によってもたらされた物寂しさが、今の私の学校生活での孤独を思い出させてくれるのだ。

順調だったはずの学生生活が突然狂い出し、私の周囲からは友達が消えた。

一人ぼっち。

クラスで私が何か発言しなくてはならないという時には、申し合わせたようにクラスのみんなが黙り込み、私の一挙手一投足をつぶさに観察し、揚げ足を取ろうと息を潜めている感じ。

リラックスだよ、リラックスするんだ、と子守歌のように雅人さんが唱えてくれていたおかげで緩んだ身体が、また縮こまっていく。

首から肩、そして背中の筋肉が否応無しに強張っていく。
肩幅に開いていたはずの内股にも力が入り、濡れた下着を締め、気持ち悪い。
雅人さんの前では微笑みを絶やさないように気をつけていたつもりなのに、表情筋が言うことを聞かず、表情が死んでいく。
呼吸がまた浅くなっていく。
今すぐにもヘッドフォンを脱ぎ外し、都会の人混みに逃げ込みたい。
その喧噪に包まれていれば、寂しさや孤独を紛らわせられる気がする。
そんな思いに囚われている私のお腹に、雅人さんの手が触れた。
先ほどと同じく、雅人さんの手の重みを意識しながら深呼吸しろと言うのだろう。
深呼吸？
リラックス？
ちょっと待って、今の私はそれどころじゃないの。
お父さんもお母さんも、おじさまもおばさまも、雅人さんもみんな私に気を遣ってくれてくれて、有り難くは思うけれどプレッシャーなの。
人間関係の闇に片足を突っ込んだ状態の私は、全て投げ出して逃げてしまうか、それとも黙って耐えるしか無い状態なの。
小細工なんか積み上げたって通用しないの。
無駄な気遣いで私を追い詰めないで――

思考が悪循環に陥っていく私。
こうなってしまうと自分でもどうしようもなかった。
悪い方へ悪い方へと思考が走り続けていってしまう。
自分を傷つけるだけの坂道を転げ落ちていく。
そしてこの自虐思想に性欲が絡みつくと、私の自慰行為は自傷行為のように過激になっていく。

どうしてお父さんとお母さんは私を田舎の親戚宅に預けたのだろう？

学校でうまく行っていないことを相談したことなんか一度もない。

もしかすると私がオナニー狂いなことに気付いちゃったのかもしれない。

子猫や子犬のようだと、愛玩動物めいた扱いを受けてきた私が、週末となれば自室に籠もってオナニー中毒。

部屋中のあらゆる物に股間を擦りつけて、惚けた顔で悦んでいるのを目にしたお父さんとお母さんは、私を持てあまして親戚宅へ預けたのでは？

ははは……じゃあその親戚宅ではどうしてくれるっていうのだろう？

ねぇ雅人さん？

深呼吸？

リラックス？

お前は神経科医か何かかよ？

――そう毒突いた時、深呼吸を促す雅人さんの手が、私のお腹を強く押した。

「……ぅぶっっぅ……！？」

身体に吸い込んでいた空気を全て吐き出させるように強く押してくる。

私は潰れた蛙の断末魔のような濁声をこぼしてしまう。

内臓をぺちゃんこに押し潰されて、酸素を吸えなくて苦しむ私を見てか、やっと雅人さんの手が持ち上がっていく。

酸欠寸前の私は急いで酸素を吸い込むのだったが、そうすると再び雅人さんの手がお腹を押し潰してくる。

「う……ぅう　ぐっっ……！」

また肺の酸素を押し出されて悶絶する。
しばらくして雅人さんの手が持ち上がり、酸素を吸い込み、またお腹を潰されて吐き出される。
有無を言わさず、それを繰り返される。
みっともなく、生存本能のままに酸素を求める私の耳に、いつしか雅人さんの声が届いてきていた。

「深呼吸だよ、心愛ちゃん。
さっきのように深呼吸するんだ。
俺の手の重みを感じて、それに合わせてゆっくり深呼吸をするんだ。
そのことだけを考えて。
そうすれば全然苦しくないから」

まるでアコーディオンの蛇腹部分を膨らませたり、縮められたりされているような気分で深呼吸どころではない。
これが雅人さんでなかったら張り倒してやりたい気分だったけれど、雅人さんもそんなことは百も承知なのではないだろうか。
なにせ私はワンピースの裾を胸元までめくり上げて、愛液に濡れ濡れの下着を見せた状態。
女の子としては服従のポーズと言っても過言では無い体勢。
だから雅人さんも強気なのではないだろうか。

再び雅人さんが私のお腹を強く押してくる。
私はその強さに呼応して息を全部吐き出していく。
そして今度は雅人さんの手が持ち上がっていくのに合わせて深く、ゆっくりと息を吸っていく。

「いいね、その調子だよ」

コツさえ掴んでしまえば、それまでの深呼吸よりも深い腹式呼吸ができるようになっていた。

雅人さんに褒められて少し調子付く。

アコーディオンの蛇腹ように膨らませられ、縮められするならそれでも構わない。

私は楽器となって艶々な声を雅人さんに届けたい気分。

雅人さんがお腹をぎゅっと押してくると、膀胱と、その下の子宮がきゅんきゅん疼く。

お風呂上がりにスポーツ飲料をたくさん飲んだために膨れた膀胱と、生殖本能に疼く子宮を一緒に刺激されると、下腹部が非常に切ない。

「漏れそうだったら、漏らしちゃってもいいから。

今はとにかく身体の力を抜いて。

どこまでも力を抜いて。

腕を持ち上げるのも、指を動かすのもできないくらいに力を抜いて」

漏らせるわけがないのに、なんてことを雅人さんは言うんだろう。

あれ？

雅人さんの声はどこから聞こえてくるんだろう？

ふと思いついた疑問に耳を澄ます。

ヘッドフォンによって完全に遮音されたはずの私の耳には、そのヘッドフォンからの音しか聞こえないはず。

「リラックス出来てきているね。

身体の力がどんどん抜けていっている。

その調子だ。

俺の声だけを聞いて」

雅人さんの声と共に波の音が聞こえる。
遠くから静かな波の音が聞こえる。
私は今、どこにいるのだろうか。
少し冷たい海にぼんやり浮かんでいる気分。
温かな日差しを浴びて浜辺で寝転んでいる気分。
とても心地良い。
蕩けるように気持ち良い。
あまりに気持ち良くて指一本動かせない。

雅人さんの声は？
海のもっと遠くから聞こえてきているような気もする。
でも浜辺で隣に寝転んで、耳元で囁いてくれているような気もする。
ううん、もっともっと私の近くで、私の中で、直接話してくれている気もする。
大好きな人の声に私は包まれる。

「心愛ちゃん、気持ちいいだろう？
これからもっともっと気持ち良くなっていけるよ？
だから俺の声に、素直に従うんだ。
いいね？
おっと、でも声は出しちゃダメだよ。
ダメだと念押ししなくても、もう口を動かすのもできないほど力が入らないと思うけど」

本当だ、唇を動かすこともできない。
心地よくリラックスした私は、舌すら動かすのが億劫だ。

「よしよし、良い子だね、心愛ちゃんは。
いっぱい、いーっぱい気持ち良くしてあげるから。
でもその前に、もう一つ約束して欲しい。
さっき心愛ちゃんは、自分自身を傷つけるようなことをずっと考えていたよね？
そんな方法で自分を慰める悪い癖は、すぐに止めるんだ。
いいね？」

どうしてそんなことまで解られてしまっているんだろう……！
すごい。
雅人さんは私のことならなんでもお見通しなんだ。
隠し事なんか何もできやしない。
私の心は全て見透かされてしまっている。
心の鍵は雅人さんに預けられてしまっている。

「そうだよ、力を抜いて。
どんどん力を抜いて、リラックスして。
リラックスして、俺の声だけ聞いて……」

もうお腹の上に雅人さんの手の重みを感じない。
深い深い深呼吸はそのままに、雅人さんはトロッと溶けて私の中に侵入し、頭の中から直接語りかけてくる。
私の全ての秘密を覗き見て、なんていやらしい。
私の耳を完全に塞いでおきながら、自分は頭の中で直接話しかけてくる。

「もっともっと力を抜いて。
そう。
良い子だね、心愛ちゃん」

雅人さんの言葉に逆らうことなんかできない。
だって、雅人さんの声を聞いて、その言葉に従うのはとても気持ちが良いんだから。
どんどん力を抜く。
気持ち良い。
気持ち良い。

どんどん私は雅人さんの言葉の中に落ちていった。

催眠で羞恥心が昂ぶり、アソコを見られただけで大量潮吹き

エッチなことがしたい――！
オナニーがしたい――！

私の全身、指の一本一本先まで、髪の一本一本まで、私という存在全てが性欲に溺れてしまっていた。
だから雅人さんの言いなりだった。
どうしようもない自虐欲求も手伝って、私は私の身体をコントロールする全ての機能を雅人さんに明け渡してしまっていた。

「ゆっくり深呼吸をして。
もっともっとリラックスするんだ」

優しく語りかける雅人さんが、しかし呼吸をするのを止めるんだと命令してくれたなら、私は逆らうことができずに窒息してしまうだろう。
心臓を動かすのを止めるんだと命令してくれたなら、それもきっと逆らうことができないかもしれない。
生存本能だとか自律神経だとか、本来なら私の意思とは関係のない深い深い部分に及ぶコントロールすら、私はすっかり明け渡してしまっている。
なんて気持ちの良い感覚だろう。
本来、女の子のエッチな場所は、男の人の性器を受け入れるとしても膣の中まで。
その膣の奥には子宮に繋がる小さな穴があるけれど、そこには男

の人の性器は入っては来れない。
それが当たり前なんだけど、今の私はその子宮への穴まで雅人さんに広げられてしまい、さらに奥の奥、子宮の中にまで男の人の性器を受け入れてしまっている気分だった。
処女の私が言っても説得力に欠けるかもしれないけれど、本来、受け入れてはいけない場所にまで誰かの侵入を許してしまった感覚、それを伝えるためには最適な例えじゃないだろうか。
愛した人にしか侵入を許さない処女膜の奥。
愛した人にすら侵入を許さない子宮口の奥。
雅人さんの声は、子宮の奥にある二つの卵巣を鉤爪でしっかり鷲掴みしているようだった。
今すぐ排卵しろと言われれば排卵できてしまうような、そんな感覚。

「良い子だね、心愛ちゃんは。
すっかり出来上がっちゃって……素直なんだね。
もう、こうしているだけでも気持ちいいでしょう？」

はい――と答えようとしても声が出ない。

「心愛ちゃんはこういうことをするのは初めてなのかな？
もしかして、何度か自分でもやったことがあるのかもね。
催眠の導入はすごく上手にできたからね。
やっぱり心愛ちゃんはエッチな子だよね、昔から。
心愛ちゃんが小学校の頃、六年生だったかな、夜に俺の部屋でおまんこ見せてくれたことがあったよね？
綺麗なおまんこだったね。
中学生になって心愛ちゃんはずぅっと女の子らしくなって、とっても可愛くなっていったよね。
今は女子校生で、さっき駅で再会した時には、本当にドキドキし

たよ。
ねぇ心愛ちゃん、またおまんこ見せてくれるかな？
見てもいいよね？」

いよいよエッチなことを語り出した雅人さんに、私は抵抗する術がない。
言葉も出なければ、手脚の指一本動かせない。

「その濡れきった下着、邪魔だからはさみで切っちゃうね」

雅人さんが立ち上がる物音がする。
立ち上がると机の方に歩いて行き、引き出しから何かを取り出す音。
そして引き出しを戻すと、私の傍へと戻ってくる。

「このはさみ、とても切れ味がいいんだ」

切れ味を証明してみせるように耳元ではさみの刃を擦り合わせてくる。
金属同士の硬質な音が甲高く鳴る。
美容師さんが使うはさみのような軽やかながら、確かな金属音。

「動かないでね、怪我しちゃうから。
絶対にだよ？
……そんなこと言わなくても、もう心愛ちゃんは全然動けないんだよね。
ほら、どう？」

はさみの金属的な冷たさが耳に触れた。

「……！」

言葉は出ない。

けれど刃物を突きつけられて平然としていられるわけもなく緊張が走ったが、それ以上の抵抗がなにもできない。

はさみの刃はゆっくりと私の首の側面を、頸動脈を沿うようにして鎖骨の方へと下りていく。

鎖骨の隆起を撫でながらみぞおちへと冷たい感触が滑り落ちていく。

冷たく、鋭く尖った感触。

そこから左の乳房の方へと進行方向を変えると、服の上から乳房を撫でて回る。

痛いくらいに勃起していた乳首を避けてくるくる回るはさみの刃は、その後、思い出したように進路を私の下腹部へと向ける。

肌の肌理に沿うように滑らかに移動するはさみの刃だったけれど、思いがけず脚を躓かせたように臍のくぼみに落っこちる。

「――――！」

臍の奥に刃物の先が落っこちてきた感触に、身体がぴくんと跳ねる。

「ダメだよ、心愛ちゃん、動いちゃダメ。

動いたら怪我しちゃうかもしれないよ。

せっかくの綺麗な身体に傷が付いちゃうかもしれない。

さぁ落ちついて。

ゆっくり深呼吸をして。

大丈夫、はさみの先に神経を尖らせていれば驚くこともないし、怪我をすることもない。

ほぅら、臍の穴から抜け出してはさみが動き出したよ」

否応なく鋭い感触を光らせるはさみの刃は、私の身体の右側面にかかる下着の紐を挟み込んでいく。

「さぁ、まずは片方を切っちゃうよ。
切れ味のいいはさみだから、一思いに切れちゃうはずだよ？
いい？
一、二……三っ！」

刃が擦れる音。
清々しいほどあっけなく下着の紐が切られる。
下腹部にあった下着による締め付けが一気に解放されていく。

「反対側も切っちゃおう。
全然怖くないだろう？　大丈夫。
でもはさみには気をつけていないとダメだよ。
さ、こっちも切っちゃうよ。
一……二……三っ！」

再び刃と刃が擦れる鋭い音。
それによって下着の締め付けが完全に消え去り、今、私のエッチな部分を隠しているのは下着の切れ端のみだ。
私の愛液を吸い込んで重く、肌に張り付いているだけの切れ端。

「残りの部分をめくったら、心愛ちゃんのおまんこ、丸見えになるね。
楽しみだよ、心愛ちゃんのおまんこ。
最後に見たのは小学校六年生の時だったね。
それからどんな風に成長したのかな？
今度は三……二……一……ってカウントダウンしようか。

カウントがゼロになったら下着をめくるよ。
おまんこ、丸見えになっちゃうよ」

小学生の頃と大きく違うのは、エッチな部分がびしょびしょに濡れていること。
今の私のエッチな部分は発情しきって愛液が止め処ない。
こんな状態のエッチな部分を見られるのは恥ずかしくて堪らないけれど、でも、雅人さんになら見られてもいい、見て欲しいという思いもある。
すっかり心は丸裸にされた気分。
次に今から恥ずかしいところも全部露わにされてしまうんだと思うと、エッチな気分が急激に高まっていく。

「三……二ぃ……一……」

カウントダウンに合わせて、私は無意識に脚を広げていっていた。
心臓が飛び出しそうなほど高鳴り、雅人さんの勿体ぶるような、ゆっくりしたカウントに焦れて焦れて仕方なかった。
全身が汗ばみ、燃えるように熱かった。
そして遂にカウントが――

「ゼロっ！！」

ゼロ――と叫ばれた瞬間、性器が露出する感覚に全身が震え上がる。
羞恥とともにエッチな部分が見られている快感が股間から頭に突き抜ける。

「っっぁぁぁあっ、ダメっ、ダメぇぇっっ……っ！」

言葉を発することもできないでいた私は、その時になってどうしようもなく喉から言葉が溢れてきた。

雅人さんの視線をいっぱいに浴びたエッチな場所が、堪えきれなくなった愛液を吹き出しそうだった。

我慢の限界がすぐそこに来ていた。

愛液が吹きこぼれないように腰を突き上げる。

その姿勢はまるでエッチな場所を衆目に晒す痴態に他ならなかったけれど、雅人さんの前で愛液を吹き出すような痴態の方が、私は何倍も恥ずかしいと思ったのだ。

エッチな場所なら昔から何度も見られている。

だけど愛液を見られたことは今日が初めてなんだから。

けれど、私の我慢のダムはすぐに決壊した。

「―くぅぅっっっっ、あっ〝ダメダメだめだめだめっっ!!」

私は雅人さんにエッチな場所を見られているという感覚だけで、激しく愛液を、潮を噴き上げてしまったのだった。

教室で大股開きで放尿プレイ&おまんこ露出

激しい潮吹き。

潮が大きな放物線を描き、ベッドスペースを越えて雅人さんの部屋の床に飛び散っていく。

ダメとわかっていながらも、身体から放出する愛液が止まらない。

長く我慢して、ぱんぱんに膨れた膀胱から勢いよく排尿する感覚。

性的快楽ではないとわかっているけれど、排尿独特の開放的な快感に身体が打ち拉がれてしまう。

フローリングの固い床に潮が勢いよくぶつかり、周囲に飛び散る音。

ここはトイレではなく雅人さんの部屋だと理解しているのに、この痴態を雅人さんに見られているのに、私の潮吹きは止まらない。

お風呂でさんざんオナニーしたので、風呂上がりに水分を大量に摂った。

そのための潮の量だとしても、ちょっと多すぎじゃないかと思うほどの量。

中学生の頃、女友達の家でこっそりエッチな動画をスマートフォンで観たことがあるんだけど、その時に観た女優さんに負けず劣らずの勢いで潮を噴き出している私。

女優さんは激しい手マンで潮を吹いたというのに、私はただ自分の劣情が高じてのこれだ。

オナニーだったら何度となく繰り返してきた。

女子校生になって回数は飛躍的に増えたけれど、だからといって愛液がちょっとくらい飛び散ることはあっても、こんなにも吹き上げるようなことは一度も無かった。

私は私自身がどんなに淫乱な女なのかを、この潮の吹き上げっぷりによって証明されている気分だった。

受け入れがたい事実ではあるけれど、じゃあ潮を止められるかと言えばそうではなく、むしろ潮を噴き上げるのが気持ち良い。

私は雅人さんに下着を切り取られ、性器を丸出しにした状態。

挙げ句に、私自身から脚を広げ、腰を持ち上げて股間を晒している体勢。

女の子の大切な場所、エッチな場所、生殖器、男の人が下品な視線を送ってくる場所、隠さなくてはならない秘密の場所、恥ずかしい場所、おまんこ。

大股開きの私は普段からの抑圧を忘れ去り、大好きな雅人さんの前であるというのに、これ以上ない開放感を存分に味わうように潮を噴き上げていた。

気持ち良い。

とても気持ち良い。

破裂的な排尿感に性的快感と開放感が絶妙にブレンドされた感じ。

イッちゃいそうなくらい気持ちいい。

腰がヒクヒクする。

雅人さんに見られているのだと思えば思うほど、羞恥心が潮の噴き出る穴を締め付けてくれるようで、なおさら噴き上がりの勢いが増していく。

干涸らびてしまいそう。

先ほどのお風呂のように、湯船の中で、次に湯船に浸かる雅人さんを想ってオナニーに狂い、たくさん愛液を漏らし、湯船を染めようとした感覚。

プールや海でオシッコするような開放的な感覚。

お布団の中でお漏らししてしまったような感覚——たとえば学校の教室で、授業中にお漏らししてしまったような感覚。

――教室には私のことを嫌うみんながいる。
とても居心地の悪い、息苦しい教室。
ただでさえ居場所がない教室なのに、そこでお漏らしなんてしてしまったら……

心臓がきゅうっと締め付けられる。
呼吸が浅くなる。

が、そこで私は深呼吸をする。
空気をお腹いっぱいに吸い込み、強張る筋肉を緩め、身体を解放していく。
雅人さんに何度も何度も繰り返し言われた深呼吸とリラックスが、反射的に私を救ってくれる。
つまらない学校の教室の端っこで小さな身体をいっそう縮こまらせていた私は、授業中にもかかわらずに席から立ち上がると、教壇に立ち、そこから教師の机にあがる。
私を嫌うみんなが一斉に私に視線を向ける。
しかし私は少しも心乱されることなく、脅えることもない。
私はみんなの前でスカートの中に手を入れ、下着を脱ぎ下ろす。
糸を引くほど愛液に濡れた純白の下着を脱ぎ払い、スカートをめくる。
教室のみんなが私のエッチな部分に視線を寄せる。
痛いほどの視線を浴びながら、私はそのままオナニーを始める。
下品なくらいに脚を開いて、指を奥まで差し込んで。
するとどうだ、私は自分でも驚くくらいに潮を噴き上げる。
豊かな放物線を描き、私の大嫌いな教室を塗りたくっていく。

気持ち良い。
とても開放的。
気持ち良い。

ぶち壊れてしまうくらいに気持ち良い。
すると突然、頭を横殴りにされたように声が響いた。
「心愛ちゃんっ！」
「……ぇ？」
「心愛ちゃん、心愛ちゃん？」
誰かの声が聞こえる。
あ、雅人さんの声だ。
でもちょっと違う気がする。
ヘッドフォンをされて、声の遠近感がわからなくなったところから響いてくる声ではなく、直に耳に聞こえてきているような……
あれ？
私今、ヘッドフォンしていない？
急に現実に引き戻されているような感覚。
まだ半分夢の中にいるような、早朝に金縛りに遭っているような感じで、手脚は全く動かない。
「心愛ちゃん、俺の声が聞こえるよね？
落ち着いて、よく聞いてね。
今からカウントを数えるよ。
ゆっくりと五からゼロまで。
ゼロになったら催眠が解けて、心愛ちゃんは目を醒ます。
まぶたを開けることができるようになるし、手脚を動かすことができるようになる。
言葉を発することもできるし、全ての催眠が解けた状態になる。
いいね？
数えるよ。
五……

四……
三……
二……
一……
ゼロっ」

瞬間、意識が覚醒する。
まぶたを開き、眼球を動かして周囲を確認する。
雅人さんの部屋にいる。
恐る恐る手脚を動かしてみると、当たり前のように手脚は私の意思通りに動いてくれた。

「心愛ちゃん、大丈夫？」

すぐ側から聞こえてくる雅人さんの声。
頭を持ち上げてその方向を見ると、雅人さんはすぐ側で、私のお腹に手を載せたままで私を見ていた。
遮光カーテンによって真っ暗な部屋の中だったけれど、真夏の強い日差しはほんの小さな隙間から入り込み、雅人さんの表情を確認できる程度には明かりがあった。

「雅人さん……？　あれ、私……」

さっきまでの性欲の狂乱はなんだったのだろうかというほど静まり返った室内で、私は咄嗟に股間に手を触れた。
が、予想外にそこには下着の感触があった。

「あれ？　あれ？」
「落ち着いて心愛ちゃん。
大丈夫、下着は無事だから。

さっきまではね、ヘッドフォン越しにマイクで心愛ちゃんに話しかけてたんだ。
催眠ってやつなんだけど……心愛ちゃん、思いっきり催眠に掛かってたみたいだね」
「催眠っ！？
え、なにが……どういうことですか？」
「下着をはさみで切り裂かれたと思ったんでしょ？
だけど下着は無事。
そういう風に思い込まされてしまうように催眠を掛けたんだよ」
「じゃあ全部嘘だったんですか？」
「嘘というか……まぁそうだね。
全部、イメージの中での話しだったんだ」

私はまだ話が飲み込めなくて、切り裂かれたはずの下着を何度も確認する。
濡れてはいるけれど、はさみで切られたような跡はない。
新しく履かせられたわけでもないし、正真正銘、これは私の履いていた下着だ。

「あっ」

私はベッドから飛び起きる。
そして床や周囲を見回す。
あれだけ潮を吹いたのだから、その痕跡があるはず。

「どうしたの、心愛ちゃん？
俺は催眠の中で、下着を切り裂いただけだけど、その後、すごく悶えてたよね？
おまんこ見られて恥ずかしがっているのかと思ったけど……違ったの？」

潮吹きの痕跡はどこにもなかった。
あの潮の吹きっぷりでは、簡単に部屋を掃除して済むはずはなかった。
あの潮吹きも催眠によるものだったというのだろうか？

「いっぱい……」
「……いっぱい？」
「あ、ううん、なんでもないです。
催眠なんて初めてで、混乱しちゃってて……」

雅人さんの部屋の中で潮吹きした感覚、教室でみんなの前で潮吹きした感覚は、生々しいリアリティを持って記憶されている。
下着を脱ぎ去って、大股開きになって、いっぱい、いっぱいの潮を噴き上げて。
まだ心臓がドキドキ高鳴っている。
今まで感じたことのない快感。
現実離れした興奮。
素晴らしい開放感。

「雅人さん」
「ん、どうしたの？」
「催眠で、もっともっと気持ち良くしてもらえるのかな？」

私の言葉が、さも意外だったという風に雅人さんは目を大きくした。
けれど、年上の男性らしい包容力のある笑みを浮かべて言うのだ。

「もっともっと気持ち良くしてあげられるよ。
心愛ちゃんは催眠に掛かりやすい体質みたいだから、きっと普通

の人じゃ到達できない深いレベルまで行けると思う。
とっても気持ち良くなれると思うよ」
「本当ですか？　あの、今……」
「いや、今日はこれくらいまでにしておこう。
また明日、そして次の日も、ゆっくり催眠を深めていこう。
そうして夏休みが終わる頃には、とっても気持ち良くなれるようになってるよ」

今すぐにでも気持ち良くして欲しい想いはあったけれど、雅人さんの言葉に従うのも気持ちがいい気がした。

「あ、そうだ、心愛ちゃん。
このことは俺たち二人だけの秘密だからね」

その言葉に私はなんだか懐かしい気分になって、忘れていた笑みがこぼれた。

「どしたの？　心愛ちゃん」
「なんだか昔を思い出しちゃって。
懐かしいですね、二人の秘密って響き。
あ、そうだ、雅人さん……私のエッチなところ、また見てみます？」
「え……いいの？」
「いいですけど……二人の秘密ですからね」

そう囁いて私は下着を下ろし、小学生の頃のように性器を雅人さんに見せる。
懐かしい感覚。
こうして小学生のように長い長い夏休みが、私と雅人さんの二人の間でひっそりと始まったのだった。

近親相姦。兄妹の超えてはならない一線

精神的な療養のために訪れた田舎町。
牧歌的でのどかな風景が広がる中を、私は涼しくなる朝晩に犬を連れて散歩するくらいで、それ以外の時間は雅人さんの部屋でエアコンに冷やされながらエッチな催眠を受け続けていた。
女子校生になって始めての夏休みとしては、あまりに地味なものではあったけれど、都会の喧噪に逃げ込んでいた頃よりはずっと精神的な落ち着きを取り戻している気がしていた。

大学生の雅人さんには、当然雅人さんの予定があるわけで、夏休み中、ずっと私に構ってくれているわけではなかった。
大学生らしく夜遊びされたり、数日留守にされることもあった。
けれどそうやって長い時間私との接触に間が空いた後は、埋め合わせのようにネチっこくエッチな催眠をしてくれる。
だから私はずっと満たされた気分だった。
雅人さんがいない時間は、私は愛する旦那様の帰りを待つ妻になったつもりで、雅人さんのお父さんやお母さんともとても仲良くなって、いろんなお手伝いをしたりした。

夏休みに田舎町を訪れた当初、私は血縁者である雅人さんとの直接的な肉体関係を望んでいたものだった。
エッチな催眠であんなにも女の子が乱れ狂う姿を目にしたのなら、普通の男の人なら手を出したくなるものなんじゃないのかと思うのだけれど、雅人さんが私に手を触れることは今の今まで一度も無かった。
催眠以外でも雅人さんが喜ぶならと思って性器や乳房を見せたり

なんてことはあったけれど、それでも雅人さんは私に触れてこない。
痩せっぽっちで、見た目小学生の私に魅力がないためなのかもしれないとも思ったりしたんだけれど、私の性器を見る時の雅人さんの目は必死そのもの。
うんと顔を近づけてくるし、今にもむしゃぶりついてきそうな雄の性欲を嫌でも感じる。
ではどうして手を触れてこないのか？
きっとそれは雅人さんの私への線引きなのだと思う。
あくまで私たちは血縁者。
禁断の恋。
自暴自棄な感覚のままに禁忌を犯してやりたいという想いは、今はもうすっかり鎮火してしまっている。
雅人さんによる線引きに倣って、私はその線を越えようとすることは考えから完全に捨ててしまうことにした。
もう雅人さんと肉体関係を持ちたいという気持ちは捨てることにした。
私たちは血縁者、親戚として、兄と妹として仲良くしていこうと努めることにした。
女子校生とは夏休みに大きな変化を遂げる生き物だけれど、私の変化は雅人さんへの初恋の形の、その変容だろう。
今でももちろん雅人さんのことが大好きだけれど、これは叶えてはならない恋なのだと心が許してしまっている。
右手の小指に結ばれている赤い糸が、やがて巡り巡って雅人さんの小指に結ばれていることを願っていたけれど、今や私の運命の赤い糸は私と雅人さんの間を横切り、ここを越えて先へは進んではいけませんよと私に語りかけてくるようなのだ。

運命の赤い糸にも線引きされ、隔絶された空間。
雅人さんの部屋で、雅人さんのベッドに横になった私は、その赤い糸に囲まれた空間に落ちていく。

雅人さんを諦めることを許せるようになった頃から、私は催眠の世界にさらに深く落ちていけるようになっていた。

自分でもそれを強く感じる。

それまではすぐ側にいる雅人さんの気配を意識してしまって、集中力に欠けた部分があったのだと思う。

でも今はもう雅人さんの気配を意識したりしなくなった。

自分の部屋で、扉に鍵を掛けて、一人っきりでオナニーする時のような感覚で催眠に落ちていっている。

恥じらいが完全に無くなり、いっぱいに股を開いて、好きなだけ性欲に溺れていく。

下品だとか、はしたないだとか、そんなことは何も考えずに気持ち良くなりたい欲求のまま、どんどん催眠に落ちていく。

「催眠を始めた時、ずぅ〜っと奥の方からバスドラムを叩いたような音が聞こえてくるですけど、あれって何なんですか？」

エッチな催眠を解除され、全身汗まみれで余韻に浸っていた私は、ほとんど意識しなくなっていた音の正体について雅人さんに訊いてみた。

「あれは心臓の音を模したものでね、胎児の頃、母親の心音を俺たちは聞いて育ってきたらしいんだ。

俺も覚えちゃいないし、心愛ちゃんも覚えてないだろ？」

「お母さんの心臓音ですよね？

覚えてないです」

「そうだよね。

でも、覚えて無くても身体は覚えているらしくてね、心音を聴くと人はリラックスできるらしいんだ。

だから導入部では心音を流しているんだ」

羊水に浮かび、母親の心音を聴いていた胎児の頃の記憶なんて、もちろん無い。

胎児の頃の私はリラックスしていたのだろうか？

お母さんのお腹の中で安心しきって、これからの人生に幸せを期待していたのだろうか？

そんなことはもうわからないけれど、雅人さんのエッチな催眠でトロッと気持ち良くなってしまっている私は、きっとそうだったんじゃないかなぁと思わずにはいられない気分。

生まれてきたことに感謝せずにはいられない気分。

十全の幸福感。

「雅人さんの匂いがするベッドシーツは、さしずめ羊水みたいなものですかね？」

「う～ん、それは……どうなんだろう？」

自分の体臭を羊水に見立てられては、素直に頷けないところだろうか。

曖昧な表情を浮かべた雅人さんは、再び私の股間を観察し始める。

赤い糸で私たちの間を線引きした頃から、雅人さんは私の裸を見ることに遠慮がなくなっていった。

私が遠慮なくエッチな感覚に耽っていくようになったのと歩を同じくするように、だ。

雅人さんが漫画や小説に出てくるような鈍感な男性ではないことを私は知っている。

とっくに雅人さんは私の想いに気付いていて、その上での線引きなのだ。

私は……ちょっとヒロインめいて雅人さんの心を読みあぐねて不安もあるけれど、きっと雅人さんも私のことを想ってくれていると思っている。

だから私たちはお互いが納得して引いた線を越えないギリギリの

ところで、遠慮や恥じらいを捨てて恋人のように性欲のままにお互いを求めている。

「雅人さん、この後、ここでオナニーするんですか？」

「うん、そうだね」

「……シーツ、そろそろ洗濯しませんか？　汗の臭いは好きだから良いんですけど、精液が飛び散ったところがカピカピになってますよ？　私、裸で横になってるからわかるんですよ」

「心愛ちゃんでオナニーするようになってからは勢いが良くてね……。今度シーツ洗っておくよ」

「それと私の下着、使った後は洗って洗濯機に入れておいて下さいね」

精液の匂いがムッと漂う雅人さんの部屋。

雅人さんはズボンと下着を下ろして、ガチガチに勃起した男性器に私の下着を絡めてしまっている。

この後、シーツに染み付いた私の匂いを嗅ぎながらオナニーして射精するつもりのようだ。

こんな具合にお互いの性欲に開けっぴろげなのに、私たちは肉体的な接触は全く持っていない。

赤い糸による線引きがしっかりとなされていて、お互いがそれを厳守しているのだ。

だけれど、もうすぐ夏休みが終わる頃になって雅人さんが言うのだ。

「今度、心愛ちゃん、毛を剃ってパイパンにしてくれない？」

「あぁ……雅人さんって少しロリコン気質ですよね」
「そっちの道に引き込んだのは間違いなく心愛ちゃんだと思うけどね」
「私のせい……かなぁ……。
んぅ、まぁ……いいですよ、毛、剃ってきます」
「本当っ!?
ありがとう、楽しみにしてるよ!」

まさか陰毛の剃毛を約束したことが、近親者の線引きを越えるきっかけになるとは、私は全く思ってもいなかった。

剃毛パイパンＪＫ。綺麗なスジまんを凝視される

雅人さんからのお願いを聞き届けるため、私は間借りさせてもらっている部屋で股を開き、陰毛に除毛クリームを塗りたくった。

好きな人がロリコン気質だという事実に、ちょっとだけ嫌な感じもしたけれど、どう考えても私はロリータ属性なので、なんとも反応に困ってしまう。

手脚がすらっと長く、胸やお尻が大きくて、いかにも大人の女性だというような魅力は私には全然ない。

痩せっぽっちで胸は小さくて、身長は小さくて、顔も童顔で。

女子校生らしさが感じられるのは制服を着ているからだけで、私服姿の私は中学生か、小学生高学年程度にしか見られない。

除毛クリームを塗った陰毛周辺、性器の辺りもまだまだ未成熟な感じで、小陰唇のびらびらがはみ出している部分はほとんどなくて、俗に言うスジまんこそのもの。

除毛クリームが効き出すまでの間、鏡を立てて性器を観察する私。

こうやって鏡を向けて自分の性器を眺めるのは久しぶりだった。

性に目覚めた頃に、自分の膣口を広げて見ながら、ここに男の人のアレが挿いるんだと思うと背筋がゾクゾクした。

雅人さんのアレは勃起すると、事前情報通りにとても大きくなった。

一目見たとき、あまりの物騒な大きさに恐怖したけれど、雅人さんが勃起した性器に私の下着を被せて自慰をしている姿を見ると、下着なんかじゃなくて私の穴を使わせてあげたくなる。

運動部だった雅人さんのたくましい肉体に対して、私の下着はいかにも子供っぽくて、あまりに不釣り合いなのだ。

だからなんだか申し訳なくて、そんな下着を使うくらいから私の

おまんこを使って下さいなと股を開いて、身体を差し出したくなる。
私なんかの子供っぽい身体ではありますが、まだ処女ですから汚れてはいませんから、と。
夏休みの間、ずっと私に構ってくれた雅人さんへ、なにかお礼をしたい気持ちはある。
それが処女を差し出すことというのは間違っているのは十分承知しているけれど、どうしてあげたらいいのか、私は思いつかない。
自分で稼いだお金で何かプレゼントしてあげたりできればいいんだけれど、お金もないし、土地勘の無い場所だからプレゼントを買うお店も知らない。
こういう時、本当に子供は不便だ。
早く大人になりたいと思う、身も心も。

除毛クリームが効いてきた頃なので、重ねたティッシュでクリームごと陰毛を拭き取る。
陰毛の生えている範囲も狭く、薄めの方なので一度で処理することができたようだった。
丁寧にクリームを拭き取り、濡らしたタオルで再度優しく拭く。
除毛クリームは肌への刺激が強いため取り残しがあったりすると肌荒れや湿疹の原因になってしまう。
そんなことを気にするなら剃刀で丁寧に剃毛した方がいいのかもしれないけれど、剃刀だと剃り跡が少しジョリジョリするらしい。
頻繁にパイパンにするなら剃刀を使うべきらしいけれど、私はもうすぐ終わる夏休みの最後に一度だけのパイパンなのだから、除毛クリームを使って触り心地も良いパイパンにしてあげようと思ったのだ。
鏡で丁寧に性器周りを確認し、陰毛が残っていないか確認する。
自分の手で何度も擦りながら肌触りに劣る部分がないかも確認する。

「よし、大丈夫。
これなら雅人さん、きっと喜んでくれる」

どこからどう見てもロリコン歓喜の一本スジ。
雅人さんへのお礼のつもりで剃毛を果たした私は、シャワーを浴びて身体を清めると、いつものように雅人さんの部屋の扉をノックした。

「雅人さん、心愛です」
「うん、どうぞ、入って」

通い慣れた雅人さんの部屋。
遮光カーテンに作られた暗室の奥で、ＰＣのディスプレイと真空管アンプの蛍火だけが明るい。
血のつながりのある私たちは、肉体的な接触は持たないと暗黙の了解の線引きをして、その上で性欲をさらけ出してきた部屋。
嗅ぎ慣れた雅人さんの精液の匂いが立ち籠めていて、もはやお互いに気にもしない。
心地良いのはエアコンが効いているためだろうか。

「たぶん、催眠オナニーができるのは今日が最後だろうね。
明日には心愛ちゃん、帰っちゃうんだろう？」
「はい、その、お世話になりました」
「いやいや、そんな堅苦しいことは明日でいいよ。
今日はさ、夏休み最後の催眠オナニーを楽しもうよ。
時間はたっぷりある。
奮発して、けっこう過激なことまでしてあげるよ」
「今までだって過激だったと思いますけど？
私、催眠の中で処女喪失したの何回目でしたっけ？　お尻の穴だって」

「まぁね。
でも今日はもっと他の場所も犯してあげるから」
「……他の場所？」

催眠による処女喪失、アナル姦、フェラチオは何度もされたものだったけれど、それ以外の場所を犯すとはどういうことだろう？

「それは後のお楽しみ」
「……それはそうと、雅人さん。
約束していたことなんですが……」
「約束？」
「はい」
「……あ、もしかして……」
「ええ、そのもしかして……ですが」

私はワンピースの裾をたくし上げて、パイパンにしたばかりの性器を雅人さんに見せつけた。

「おっ！　……近くで見てもいい？」
「ふふ……どうぞ」

雅人さんは転げるようにして私のそばにやってくると、四つん這いになって顔を近づけてくる。

「とっても綺麗だね。
すごいよ、こんなの……
心愛ちゃんが小学生で、一緒にお風呂に入ってた頃みたいだ。
いいね、とってもいい！」

やっぱり雅人さんは変態だなぁ～と心の端っこで思いながら、私

はワンピースを脱いで全裸になる。
雅人さんの鼻息が恥部に触れるのを感じると、エッチな気分が急速に高まりつつあった。

「触っちゃ……ダメですよ」
「うん、わかってる」

血のつながりのある者同士として、決して踏み越えてはならない一線。
私はこの線引きを信用しきっていた。
雅人さんに抱かれることは絶対にないと諦めていた。

「後からも見せてあげますから、今は最後の催眠オナニー、始めましょうよ」

パイパンまんこに魅入られるような雅人さんに、ちょっとだけ私は不安を感じ始めていた。
私はいつも通りにヘッドフォンを被ると、雅人さんがオナニーによって飛び散らかした精液の跡がカピカピなシーツの上に寝る。
精液の匂いが濃厚に立ち籠める。
シーツを洗濯するように言っても洗濯しないのは、自分の精液の染みの上に私が全裸で寝転がる姿を見るのが好きなためだろうと推測している。
なにせ枕にだって精液の跡がしっかりあるくらいなのだ。
そして枕にある精液の跡は、飛び散った精液というよりも敢えてそこに吐き出したという感じ。
この枕で雅人さん本人も寝ているのかどうかは怪しい。
もしかするとシーツも枕も私専用にして精液を撒き散らしていたのかもしれないけれど、そういう雅人さんの変態性については了解して受け入れているつもりだ。

けれど今日はちょっと不安を感じる。
パイパンまんこを見た雅人さんは、まるでパイパンまんこに囚われたように、心奪われたように、催眠にかかったように――視線に狂気が感じられるのだ。

でも、きっと大丈夫だろうと思って私は目を閉じる。
ヘッドフォンの向こうから聞こえてくる波の音、心音を模した音とを聴きながら、深呼吸を繰り返し、全身の力を抜いていく。

きっとこうしている間も雅人さんはパイパンまんこを見つめているんだろうなと思うと、エッチな部分が疼いて仕方なかった。
雅人さんの視線を恥部に感じながら、ふと私は疑問を思う。

どうして私は除毛クリームなんか使ったのだろうか、と。
どうせ身体を触れあわせることのない私と雅人さんなんだから、触り心地を気にして除毛クリームなんか選ぶ必要はなかっただろう、と。
私はそんな少しの疑問と雅人さんへの不安を感じながら、とても深い催眠の世界に落ちていった。

まるでフィストファック。ロリＪＫに極太ちんこを二本挿し

「これが夏休み中、最後の催眠になるだろうね。
だから今日は特別、大奮発、大盤振る舞いだ。
……どう？
そう言われると、心臓がドキドキ高鳴ってくるだろう？
期待しちゃうだろう？
心愛ちゃん、どんなおちんちんに犯されたい？
イメージしてご覧よ。
期待するままに」

私は催眠の世界にとっぷり沈み込み、優しい波に揺られながら、遠くから聞こえる雅人さんの声を聞いていた。
今日の催眠オナニーが終わったら、明日には以前の生活の中へ帰らなくてはならない。
夏休み最後の催眠オナニーになるんだから、一切の出し惜しみなく性欲を最大限に満たしたいと私は思う。
ついさっき陰毛を全て綺麗に取り去り、触り心地もいいパイパンにしたのは、この最後の催眠オナニーに私自身も気持ちが昂ぶっていたからだと思いたい。

「心愛ちゃんはどんなおちんちんが好きかな？
大きいおちんちん？
膣の奥まで届く長いものがいいのかな。
子宮口をグイグイ突き上げられたら、子宮は妊娠したくて焦れったくなっちゃうよね？
それとも太いおちんちん？

心愛ちゃんの小さな穴を押し広げて、無理矢理入ってくるようなのがいいかな？

規格外サイズを挿入されたらどうなっちゃうか、心愛ちゃんはそういうのも興味あるんじゃないの？

だって心愛ちゃんはエッチだもんね」

雅人さんの言葉に導かれ、私の脳裏には長さのある男性器と、太さのある男性器のイメージが浮かび上がる。

そしてイメージに呼応するように私のエッチな部分が熱を帯び始める。

長さのある男性器に奥深くまで挿入されてみたい気もする。

太さのある男性器に無理矢理に膣口を広げられてみたい気もする。

おまんこをグチャグチャに弄ばれたい気がする。

それは田舎町に避難してきた当初、私の中に確かにあった自暴自棄な破滅衝動から来るのではなく、本当にただただエッチな劣情から来るものだった。

もう私は学校のクラスで一人ぼっちな寂しさに膿んでいた頃の私ではなくなっていた。

きっと夏休みを終えて学校に戻っても、また一人ぼっちだと思う。

けれどそれがなんだ。

たかが学校内での孤独で、私の人生を暗くされて堪るか。

私の人生はまだまだ多くの幸福と快感に満ち満ちているはずなのだ。

「じゃあ心愛ちゃん、長いおちんちんと太いおちんちん、その両方のおちんちんを一度に挿入しちゃおうね」

「え、いきなりはダメ……っ」

「ダメじゃないよ。

心愛ちゃんならすぐにも二本挿しくらいできるさ」

「……もう少しゆっくり……」

「大丈夫。
だって心愛ちゃんは催眠に落ちていても声を出したりできるじゃない？
声を出しても催眠が解けることもない。
とっても深いところまで落ちていけている証拠だよ？
だから大丈夫。
おまんことお尻の穴、二カ所に同時におちんちんを入れちゃおうね」
「うぅ……」

催眠中でも声を発することが、そういえばいつの間にかできるようになっていた。
雅人さんが言うには催眠に掛かっている時と掛かっていない時の境目が薄くなってきているためらしい。
完全に境目がなくなってしまったらどうなってしまうのだろうという気がするけれど、不思議と怖い感じはしない。
いくら催眠中に喋られるようになったと言っても、基本的に雅人さんの声には逆らえないのと、少し関係があるのかもしれなかった。

「いいかい？
長いおちんちんと太いおちんちんに同時に犯されるよ。
犯される心の準備をして。
……でも、おまんことお尻の穴、どっちをどちらのおちんちんに犯されるのか、それはまだ決めちゃダメだ」
「え？」
「おまんこには長いおちんちん？　太いおちんちん？
それともお尻に長いおちんちん？　太いおちんちん？
心愛ちゃんはそれをずっと決めあぐねている状態。
どちらにしたらいいのかわからなくて、とりあえずそれぞれのおちんちんの先端を、おまんことお尻の穴に当ててみようか？

ほら、おちんちんの先端が二つの穴に当たるよ……
三……
二……
一……
ゼロっ」

熱く、固い感触が私の膣口と肛門に押し当てられる。

「あゃぁんっ！」

焼き鏝を押し当てられたような鋭い感触。
膣口に当たっているのが長さのある男性器で、肛門に当たっているのが太い男性器。
どちらも今すぐにでも挿入を果たしたいかのように先端を強く押し当ててくる。

「心愛ちゃん、おちんちんが欲しくて欲しくて堪らないようだね。
言ってもいないのに脚を開いて、受け入れ体勢は万全だね。
次は長いのと太いのを入れ替えてみようか？
いくよ、ほらっ」

パンッ！　と雅人さんが両手を打ち鳴らすと、瞬間、男性器の位置が入れ替わる。
太い男性器が膣口に押し当てられると、その太い逞しさに子宮がきゅんきゅん鳴る。
長い男性器はぬるりと直腸に潜り込んで行きそうで、慌てて肛門を締める。でもちょっと潜り込まれたような気がして背筋がゾワつく。

「どっちのおちんちんをどっちの穴に挿れようかな？

ダメだよ、心愛ちゃんはまだ決めちゃダメ。
ほら、両方のおちんちんを交互に二つの穴に当ててごらん。
どっちも気持ち良いね。
当ててるだけでも気持ち良いね」

膣口と肛門をとんとんノックされて、性感が高まっていく。
長い男性器はさらに長さを増して、今や男性の片手ほどの長さへ。
太い男性器はプロレスラーの二の腕のような太さへ。

「そろそろ挿入してあげようかな。
でもどっちのおちんちんがどちらの穴に挿入されるかは、挿入されてからのお楽しみだよ。
心愛ちゃんはどちらの穴にどちらのおちんちんが挿入されるか、楽しみにしていてね。
さぁ行くよ。
俺がカウントを数えるから、それがゼロになったら同時に挿入されるよ。
いい？
三……
二ぃ……
一……
ゼロっっ！」
「ん〝っあああっっっ〝っっっぁっぅ！！！」

それまで膣口と肛門に当てられていた熱い硬質感が、それぞれの穴へ強引に押し入ってきた。

「んんんっっぅぅぅぅ〝ぅ〝っっっっ！！！！」

とても長く、とても太い感触。

男性の両脚を膣と肛門に突っ込まれたような強烈な感覚に、私は奥歯をかちかち鳴らしながら呻き続けるしかなかった。
男性の脚が太ももまでずっぽり埋め込まれる感覚。
喉から足の先が飛び出てしまいそう。

「挿入されたね。
心愛ちゃん、どっちの穴にどっちのおちんちんが挿入されたのかな？
教えてくれない？
んぅ？
もう喋られないくらい気持ちいいんだね？
いいよ、そのままで。
心愛ちゃんは処女だから、どういうおちんちんが本当に気持ちいいのか、わからないもんね。
長くて、太ければ良いってもんじゃないけど、でも、心愛ちゃんは処女だからそれでいいよね？
長くて太くて大きなおちんちんに二本挿しされて、イッちゃうほど気持ち良いね？
イク？
イッていいよ？
ぴくぴくしちゃって、可愛いよ」
「イ……ィグゥゥッ！」

とんでもない太さと長さの男性器に膣と肛門を犯されて、処女の私は白目を剥いて一度目の絶頂に達した。

異物挿入と疑似出産

膣と肛門に脚を突っ込むなんて、あまりに非現実的な行為であったけれど、それが催眠の世界の中では許される。

底の浅い膣に脚を突っ込んだなら、膣口は裂け、子宮は踏み抜かれてしまう。

肛門も同じように激しい裂傷を負い、内臓破裂でショック死待ったなし。

激痛に次ぐ激痛が襲ってくるはずなのに、私は膣と肛門に脚を突っ込まれたイメージで性的快感を感じて絶頂に打ち震えている。

雅人さんの催眠イメージは過激を通り過ぎて危険なものが多いように思う。

膣と肛門に突っ込んだ両手でじゃんけん大会を開催されるイメージ催眠くらいが私には丁度良くてとても気持ち良かった。

雅人さんが「じゃんけんぽん！」と掛け声を掛けると、膣と肛門の中に突っ込まれた手でじゃんけんがなされる。

グー、チョキ、パー。

雅人さんは膣の中の手が何を出したのか、肛門の中の手が何を出したのか、それぞれ訊いてくる。

グーの時はまだ良い。

チョキの時は指先が子宮にまで突き入れられたような感覚できゅんきゅんする。

パーの時は膣も肛門も破裂するような感覚で、麻薬的な恍惚感がある。

そうしてじゃんけんを繰り返されると膣と肛門をぐねぐね掻き回されるようで、それがやたらと気持ち良かった。

お尻にいろいろな大きさのボールを挿入されるイメージ催眠もあった。
パチンコ玉、ビー玉と始まり、次第に大きな球体を肛門に挿入される。
やがて野球ボールを肛門に突っ込まれ、次にサッカーボール、次にラグビーボール、次にボウリングボール、最後にバランスボールを突っ込まれた。

「どのボールを挿入されるのまでが気持ち良かった？」
「え？」
「全部が全部気持ち良かったというわけじゃないだろう？
いいんだよ、正直に答えて。
どの大きさのボールまでが気持ち良いって感じた？」
「あ……その……」
「野球ボールくらいまでかな？
イメージが追いつきやすいもんね。
サッカーボールからは大きさが過ぎて、気持ちよさを感じなかったんじゃないかな」
「えと……」
「……ん？」
「ボウリングの球までは……感じました」
「それは……凄いね。予想外だった。
催眠に慣れていけば、きっとバランスボールを挿入するイメージでも感じられるようになるよ」
「バランスボールは、ぽわんぽわんって跳ねてるイメージが強くって、お尻に入れるイメージが湧きませんでした」
「あぁ……それはそうだよね。
俺の選択ミスだったね、別のイメージが強いものは選ぶべきじゃなかったかな。

ところでどのボールをアナルに入れられるのが一番気持ち良かった？」
「そ、それは……」
「それは？」
意地悪な顔をして雅人さんは訊いてくる。
「ラグビーボール」
「あぁ……」
なるほどなるほど、と頷くようにして雅人さん。
「あの独特の形状がいいんだろうね。
ただの球体と違って、長いストロークを楽しめるからね。
ボウリングボールも良かったんじゃない？
あのずっしりとした重みを下腹部に感じるのって、女の人はけっこう好きみたいなんだよね。
妊娠しているような感覚、だからね」
ボウリングの球を挿入された時の、何とも言えない安心感のような温かさ。
ずしっとした重みがもたらす不思議な感覚は、なぜかそれまでと違った種類の気持ちよさがあった。
でもそれが何かは解らないでいた。
よく解らないけれど気持ちいい。
漠然した気持ちよさ。
「妊……娠……っ」
言葉に言い表すことができなかった感覚を定義付けられると、ま

すますイメージが強くなってしまう。
大好きな人の子供を身籠もった妊婦になれたら、それは女として幸せなことに違いない。
ボウリングの球を挿入された時に感じた独特の感覚は、妊娠という女の幸せのためだったのだと思い込めば、またボウリングの球を挿入されたい気になっていく。
肛門に入りきらない大きさだということなんか忘れて、また挿入されたいと思ってしまう。
こういうイメージ催眠の繰り返しを経て、私は膣と肛門に両脚を深々と挿入されたイメージで快感を感じて、絶頂してしまっている。
イメージが過激であっても、私の性感神経は上手に感応する。
まだバランスボールを挿入するは無理だけど、ラジコンカーを膣に突っ込んでタイヤを回転させたり、消防車の放水ホースを突っ込んで放水させたりするのは余裕綽々だった。

「今度は心愛ちゃんにフェラチオして貰おうかな。
この前みたいに喉の奥まで。
いや、食道を通り過ぎて胃の中まで今日は行ってみようか。
じゃあ、口開けて。
心愛ちゃんの唇、いつもぷるぷるしてて可愛いよね」

リップクリームを塗った唇の間に、雅人さんの勃起した性器が入ってくるイメージ。
熱い熱い肉の棒が口内一杯に入り込んでくる。
イメージ催眠とわかっているはずなのに、喉奥を刺激されたつもりで嘔吐反射によって吐き気が込み上がってくる。
それをぐっと堪えると、雅人さんの性器の先っぽは容赦なく喉を通り過ぎて、食道へと進んでいく。
極太の胃カメラを飲まされているようなイメージ。

「心愛ちゃんの中、気持ち良いよ。
もっと、もっと俺を中まで入れてくれよ。
ほら、胃の中まで入ったよ。
でも今日はもっともっと奥まで行きたい」

胃カメラを飲まされた患者よろしく微動だにせずにいた私だったけれど、雅人さんの性器が胃を通り過ぎて、さらに奥まで入ってくるイメージに体が震えだした。
極太の胃カメラだと思っていれば許せたイメージが度を超えると、それは雅人さんの異常に長い性器となって、私の内臓を犯し始める。

「ほら十二指腸に入ったよ」
「ぅぅっっぐっっっ！　ぶぅぁっっぅっぅ！　ぅぅぶぐぅぅあぁっっ！」

顎が外れるほど大きく口を開いたまま、嘔吐反射と戦いながら汚らしく呻く。

「次は小腸だね。
ぷりっぷりの腸壁、気持ち良いよ」

痙攣が全身に広がり、鼻水と涙が溢れてくる。

「そして大腸。
ここを抜ければ、外に出られるね」

内臓を猛烈な速さで雅人さんの性器が犯していく。
今や内臓ばかりでなく、全身の隅々に広がる毛細血管の一本一本までに雅人さんの性器が入り込んできたような気分。
未知の寄生虫が体に入り込んで、体を占拠していく感覚。

激しく体を震わせる私は夥しく失禁しながら、言葉にならないうめき声を上げていた。
それなのにどうしてだろうか、体に寄生虫が潜り込むイメージと、ボウリングの球がもたらした妊娠のイメージが重なる。
私の体の中に私以外の生命を抱えるイメージ。

「さあ肛門まで来たよ。
後はここを内側から押し開けば外に出られる！
いくよ、ほぅら！」

肛門括約筋が自律的に拡張していく。
そしてそこから雅人さんの大きな男性器が、まるで赤ん坊のように出てこようとしている。
失禁したのはさながら破水の状態を示すように。
私は精液痕でカピカピのシーツを鷲掴み、大股開きで激しく力んだ。
浅い呼吸で酸素を溜め、一気に吐き出すようにして力を入れる。
肛門が裂けてしまいそうな痛みと女の悦びが綯い交ぜになりながら、私の心を支配していく。

「ほらっ、出るよっっ！」
「あ〝ぁ〝ぁ〝ぁぁっっっっうぅぅ〝っ！！」
「よし、出た！」

鉄の球のようにずっしりと重いラグビーボールが肛門を押し広げ、通り抜けていく感覚。
お尻の穴は不思議とひとりでにぽっかりと大穴を広げて内臓の色を晒していた。
そして私自身はそんなことにも気付かず、ただただ疑似出産という過激イメージに伴う性的快感に翻弄されてアヘ顔でイキ酔ってい

た。

クリトリス切除・脳姦の強烈催眠イメージ

催眠イメージによる疑似出産を終え、私は茫然と呼吸を整えているばかりだった。

さながら分娩台に座らされて、両脚を広げられているような格好のまま。

恥ずかしい格好ではあったけれど、出産に伴う過大な疲労によって股を閉じることも叶わない。

いや、これも催眠によるものなのだろうか？

とっぷり催眠に犯された私の脳内の、ほんの僅かに正常な部分だけが夢現の境目を辛うじて捉えている。

処女のくせに出産なんかできるものかと醒めた認識があるものの、分娩を終えてなお開きっぱなしの肛門を閉じることができないでいる。

出産は肛門で行うのではないという当たり前の事実は、すっかり私の脳内では快感に蕩けて消えてしまっていた。

「心愛ちゃん、この音、聞こえるかな？」

シャキン、シャキン――という鋭い金属音。

以前に私の下着を切り裂いたはさみの音。

「はさみの音、よぉく覚えているよね？

もし忘れちゃってても、思い出せるよね？

そう。

心愛ちゃんの下着を切り落としたはさみだよ。

久しぶりだね」

雅人さんはそう言うと、また耳元ではさみの刃を擦り合わせて金属音を鳴らす。
目の前でシャキンシャキン、左耳のすぐ側でも、のど元、乳房の前、臍の上、股間の傍、また顔の前に戻ってきてシャキンシャキン、右耳の側で、次は――両耳の前で、次は頭の中ではさみの刃が打ち鳴らされる。

「とっても切れ味のいいはさみなんだよ？
あれ、そのことは前にも教えたよね？
覚えてる？
とっても切れ味がいいんだ。
じゃあ、なにか切ってみようか？
なににしようかな？
あ、そうだ。
俺のおちんちんを切ってみようか？」

嗜虐心に満ち満ちた声音で雅人さんは囁いた。
自分の性器を切り落とす？
そんな危険なことは止めて欲しい。
雅人さんを止めようと思い、声を出そうとするが声が出ない。
それは当然だ。
私は雅人さんの性器を咥えている状態だったはずなのだから。
フェラチオからイラマチオへ、さらに喉を犯され、食道、胃、十二指腸、果ては大腸から直腸、そして肛門を抜けて私を串刺しにしたままの雅人さんの男性器。
私は大口を開け、肛門を全開にしたままはさみの音を聞いていた。

「俺のぶっといおちんちんだって、このはさみなら簡単に切り落とせるんだ。
やってみるよ。

三……
二……
一……
それっ！」

はさみが鳴る音全身に広がる。

「痛っったたたたたたっっ！
本当に切れちゃったよ、どうしよう、切り落とされたおちんちんが暴れてる。
心愛ちゃんの中で暴れてるよ」

頭の僅かに正常な部分で、雅人さんの語る催眠イメージの荒唐無稽さに失笑を隠せないが、でも私の体は私の体の中で暴れる雅人さんの男性器をイメージして同調し、体を引き攣らせ、手脚をばたつかせる。

それに伴い性的快感を与えられ、興奮の度合いが増していく。
脳の片隅で失笑していようがなんだろうが、私は全身に粒の汗を掻いて、涙を流し、洟を垂らし、涎をこぼして、まるで殺虫剤を浴びせられた昆虫の死に際のように藻掻き苦しんでいた。
巨大なウナギが肛門から侵入し、体を犯すような感覚。
性感神経の一本一本が生き物のように暴れ狂い、その凶暴な暴れ様のためにどこかの性感神経が切れてしまったかのよう。
身体の引き攣りが厳しくなっていく。
脳を包む頭蓋骨を鐘に見立てて誰かが鐘撞きをしているようだった。
頭蓋骨が撞かれる度、強い振動で視界が揺れ、頭の中で快感の音色が鳴り響く。
何度も打ち鳴らされる快感の鐘。
脳が蕩けていく。

「心愛ちゃんのクリトリス、ぷっくり膨らんで……エッチな塊だね。
これも……切り落としちゃおうか？
いいよね？
ほら、はさみの両刃にクリトリスが挟まれたよ。
冷たい金属の感触を感じるだろ？」

氷のように冷たい感触が、私のクリトリスを挟み込んでいた。
女体における最大感度の性の芽。
それを切り落とされてしまったら……激しい性感が襲ってくるに決まってる。
これ以上、これ以上の性感をぶつけられてしまっては、本当に頭がおかしくなってしまう。
狂ってしまう。
もう……催眠の世界から戻れなくなってしまう。

「心愛ちゃん」

瞬間、周囲の音が掻き消えた。
圧倒的な静寂の中、雅人さんが私を呼ぶ声だけが聞こえる。
囁き声なのに、本当にすぐ耳元で、いや頭の中で直接囁くような声。

「切っちゃう、ね」

チョキン――

「ぅ〝っぐあっっぁっっっ〝ん〝っっぁぁ〝ぁ〝っ！！」

家の中を走り回って遊んでいたら鋭い机の角に股間を、ちょうど

クリトリスをぶつけてしまった時のような激痛が何十倍増しになって襲ってきた。
同じようにクリトリスでオナニーして感じる性感が何十倍にもなって私を襲う。
あまりに強烈な刺激にイクにイケなくて私は濁声で悲鳴を上げるしかなかった。

「い〝っっあ〝んっっ〝ううう〝ぎぁっ〝んぅ！！」

激痛と性感でのたうち回る私の頭蓋骨を、雅人さんは掴みあげた。

「心愛ちゃんは頭の中のどこかで、まだ催眠に掛かりきってないところがあったよね？
でも今日は心愛ちゃんの頭の中を全部を全部、催眠で犯しきってあげるから」

幽鬼のような抑揚の無い声で雅人さんはそう宣告すると、切り落とした性器の残り部分を私の耳に強く押し当てた。
プールや海で耳に水が入るような感覚に続き、それがどんどん頭の中に浸透するように広がっていく。

「ふはぁぁっ……心愛ちゃんの頭の中、トロっトロに熔けちゃって気持ち良いね。
俺のおちんちん、どんどん大きくなっていくよ。
わかるだろ？　ほら、こんなに感じちゃってる」

眼球の裏に雅人さんの性器の存在を感じる。
雅人さんは私の耳に、側頭部に腰を叩きつけはじめ、本格的に私の脳を犯し始めた。
鐘撞き棒で頭を叩き潰されるかのよう。

ぐじゅ……ぐじゅっ……ぐじゅつ……

脳がシェイクされる。

涙、洟、涎、尿を垂れ流す私の視界はどんどん白み、身体は重力を忘れて大気に浮かんでいるかのよう。

「気〝持ち良〝い〝っ！　ぎ持ちぃ〝いっ〝！　っぎも〝ぢぃいっ〝！

もっど！　も〝っどっ！　あだま〝っ……ぐちゃ……っあ〝んっ！　い〝いっ！！　ぎも〝ぢっ……サイ〝こっぅ！！　もっ、どっっ！！　あ〝ぁ〝っ！」

「俺、もうイキそうだっ！

中で出すよっ！

心愛ちゃんの頭の中に出すよ、心愛ちゃんの中を一杯にしてやるっ！

ああぁ〝っっっっ〝ぅ！！」

雅人さんはみっともない叫び声をあげながら絶頂に達した。

脳の中に大量の精液が吐き出される。

頭蓋骨の中を満たす大量の精液。

真っ白く、ネバネバした精液。

私の視界は真っ白に埋まり、そのまま何もかもがわからなくなった。

ロリ女子高生を子宮姦・ウテルスセックスで猛烈中出し、種付け

頭の中に直接精液を吐き出される。
ドロッとして、ネバネバして、髪に付いたら落とすのに手間取る白濁液。
それを頭の中に、脳の中に勢いよく吐き出される。
プールで鼻に水が入ると痛む部分を底面に、頭蓋の器の中に粘着性の精液が乱暴な勢いで注がれていく。
頭が馬鹿になっていくような感覚。
視界が白み、早朝の田園を覆う濃霧に包まれたよう。
私の頭蓋はとろっとろの蜂蜜を納めた瓶のよう。
脳はその中にほわほわと浮かび、やがて沈んで蕩けていく。
ネトッとした蜂蜜の重たい液体が脳の皺の奥まで、身体の隅々まで、耳の奥まで、口の中、奥歯の裏側まで、脇の下、臍の奥、性器の襞、お尻の奥、爪の間、全てを飲み込んでいく。
酸素の届かない瓶詰めの世界。
私は瓶底に落ちていく。
甘い甘い優しい蜂蜜に抱かれ、これ以上無い抱擁感と密着感に包まれ窒息してしまいそうなのに、呼吸はどこまでも穏やかで、鼻腔を空気がくすぐるたびに快感が燻る。
とても幸せな気分に落ちていく。
幸せすぎて自然と込み上げてくる笑いを止められない。
今、私自身どんな表情なのか怖いくらいだったけれど、それすらも幸せに上塗りされていく。
消防車の放水ホースを頭蓋に突っ込んで、そこから快楽物質を放出されているかのよう。
幸せという名の羊水の中に浮かんでいるかのよう。

催眠によって私は雅人さんの命令でしか手脚を動かせないはずなのに、この時の私は心地良い開放感に任せて羽を広げるように手脚を広げ、羊水の中でバランスを保とうとして泳ぐよう。
無垢の笑いを続けながら、それはまるで天使のように――

そんな舞い上がるところまで舞い上がった私の腰を、誰かが両手でしっかりと掴んだ。

「ごめん、心愛ちゃんっ！
俺、もう我慢できないっっ！」

雅人さんの声。
でも、あの遙か地平の彼方から聞こえてくるような催眠の声とは違う。
天使を掴まえようとその足に手を伸ばし、羽を折り、墜落を狙う人間のような声。
人間は空を舞う天使に届くように長い槍を拵えており、それを天使の身体に突き立てる。

「づっ……あ〝あ〝っぅぐ！」

鋭い槍の先で突き刺されたのは股間。
激痛が全身を駆け抜ける。
私は翼を羽ばたかせて空に逃げようと足掻くものの、雅人さんは私を捕まえて離さない。
天使殺しの槍を何度も何度も私の股間に突き刺してくる。

「心愛ちゃん許してくれっ！
俺たちは親戚同士だけど……だけど……もう我慢できないんだっっ！

あぁっ気持ち良いっ！　最高だっ！
ずっと、ずっと心愛ちゃんを抱きたいと思ってたんだ！
ずっと、ずっと前からっ！
　俺の物にしたいんだっ……だから帰らないで、ずっと俺の傍にいてくれ！
こ……子供っ、子供を産んでくれっ！
そうだ……まだ催眠が効いてるのなら……
心愛ちゃん、聞こえるよね？
排卵……するんだ。いいね？
卵子を出すんだ。
そして俺の精子で受精させるんだ。
ほら……この子宮の入口を開けて……一番奥で中出ししてあげるからっ」

槍が股間を執拗に攻め立ててくる。
一突き一突きが重く、何度も同じところを狙ってくる。
どんどん奥深くまで槍が刺さってくる。
さきほどまで幸せの羊水に浮かんでいたと思っていた頃、全身という全身、身体の中の隅々までに羊水が行き渡っていた感じだったが、槍が私の股間の奥を掘り進めている先は、まだ未踏の場所だった。

「よし、子宮口が開いてきた。
あとは力押しで入れそうだ。
心愛ちゃんの子宮の中まで入るよ、そこで種付けしてあげるからっ」

ぐぐぐっ……と股間の奥に強烈な存在感の何かが侵入してきた。

「いぎぃぃあぁぁぁぁっっっ！！　い〝だっいっ！痛い〝っ！！痛

〝っっっいっ！
あぁぁぁっっ〝〝っ！！　痛〝い〝っっっっっ！！」
「ごめん心愛ちゃんっ！　すぐ出すからっ！　もうイクからっ！
でももうちょっとだけ！　心愛ちゃんの子宮の中、すんごい気持ちいいんだっ！　もぅちょっとだけ、もうちょっとだけっっ！！」

天使を悪魔に変えてしまうような地獄の槍のごとし。
何度も重ねて突っ込まれる激痛に私は絶叫と共にのたうち回る。

「心愛ちゃんの子宮の中まで犯せるのは俺だけだっ！
凄いっ……凄い気持ぢいいっ！　こんな……こんな奥までっっ！」
「やめ〝でっっ！痛い〝のっ！痛い痛いっっ痛〝っぃ！！」
「もうイクッ！　出すよっ！　種付けするよっ！
んんっ……！
あぁっ〝っ……出てるよっ、すげぇ出てるっっ！
んぁぁっ〝！！　止まんねぇっっ！！
って……子宮がっ……閉まりだしたっ！
ち……千切れるっ……でも……出るっっっ！」
　ぅあああっ！！」

槍を何度も突き刺されたところを中心に、地獄の溶岩を流し込まれたような灼熱を感じる。
そこは私の女の中心。
幸福の空を羽ばたいていた私は、槍の投擲を喰らい、地面へと墜落していく。
高い空から真っ逆さまに地面へ墜落していく――

――私は目を開いた。
涙で潤んだ視界。
瞬きをして涙を飛ばすと、雅人さんの部屋にいる、その当然のこ

とに気付かされる。
悪夢から目覚めた後のように心臓が深く脈打ち、胸が痛い。
全身の強張りをほぐすように胸一杯に空気を吸う。
そうして精液臭い枕から頭をあげると、私の股の間に、全裸の雅人さんが私の骨盤にしがみつくようにしてそこにいた。

「ごめん心愛ちゃん、本当にごめんよ」

謝る雅人さんは、ゆっくりと腰を引いていく。
下腹部に強烈な違和感を感じるものの、私は悪夢から目覚めたばかりで気が動転していたためか、さほど痛みを意識しないで済んでいた。
子宮や膣が丸ごと引き摺り出されるようだったが、視界に映ってきたのは雅人さんの太くて長い男性器。
白い精液に塗りたくられ、さらに真っ赤な血が鮮やかに散っている。

「嘘……」

頭からサーッと血が引いていく。

「本当にごめんっ！　ごめんよっ！」

雅人さんはベッドに頭を擦りつけて土下座して謝りだした。
私の股間から溢れ出した精液と破瓜の血が前髪に触れているのだけれど、雅人さんは頭を上げることなく土下座を続けた。
私は両脚を開かされたままの状態で少しの間、雅人さんの土下座を茫然と見ていることしかできなかった。
やがて認識が追いついてきて、雅人さんと肉体関係を持ってしまった事実、雅人さんに中出しされた事実が重い現実感となって私に

襲いかかってきた。
胃がきしむ。
これで本当に妊娠してしまったらどうなるのだろうか？
不安と恐怖で頭がいっぱいになる。
まるで高校のクラスの中にいる時のよう。
息苦しい。
嫌だ、嫌だ、嫌だ……！
泣きたくて、逃げ出したい心境にあって私は――しかしそこで不思議とゆっくりと深呼吸をした。

「……あ……」

自然と自分がリラックスするために深呼吸を始めたことに、私は気付いた。
肩の力が抜け、どんどん身体が緩んでいく。
催眠導入として何度も何度も教えてくれた深呼吸によるリラックス。
身体の力を抜いて、深呼吸をして……優しくなっていく感じ。
優しくなって、なぜか微笑みがこぼれてくる感じ。
実際、私はくすぐったく笑いだしていた。

「え……心愛ちゃん？」
「はい？」
「……どうして笑ってるの？」
「どうしてって……。
えと……
そうだ、ほら、中出ししたばかりの相手が笑ってたら、天使みたいに見えませんか？」
「天使？」

私は改まって雅人さんの名前を呼ぶ。

「雅人さん、一夏の間、お世話になりました。私、元の場所に帰ります」

夏休み――永遠に解けない催眠の世界

夏休みが終わり、私はまた学校に通い始めた。
当然のようにクラスに私の居場所はなかったけれど、不思議なくらいにそれが全く気にならなくなっていた。
最後の雅人さんの催眠は、雅人さんが私を姦通し、中出ししたことで催眠解除が有耶無耶になったままだった。
そのためなのかどうかは私にはわからないけれど、私は教室の中にいながらも、あの心地良い催眠の世界に、心地良い虚空に浮かんでいるような感覚がどこからか私に微笑みかけてくるようなのだ。
たとえば窓の隙間から吹き込んできたそよ風に。
校庭で運動する子達の声に。
突然授業中に鳴りだした誰かのケータイの着信メロディに。
休み時間の教室の喧噪に。
テスト中の張り詰めた静寂に。

そして夏休みが明けてからというもの、クラスの中に童貞・処女を捨てた子がちらほら現れたことを、私は皮膚感覚で感じ取れるようになっていた。
彼ら彼女らも同じように私が処女を捨てたことをなんとなく感じ取っている節があった。
なんというか、まだ未経験の人たちとは違う雰囲気をまとっているように思う。
なんだろう……
君もこちらの世界に来たんだね？　と語りかけてくるような彼ら彼女らの目。
新しい世界へようこそ――と優しく迎え入れてくれるような優し

さ。

雅人さんにいい加減多すぎる量の中出しをされた後、しばらく妊娠の恐怖に脅えていたものの、それでもちゃんと生理が来た。

雅人さんの精液と精子を全て吐き出してしまうような経血とレバー状の肉片を手にとってみると、夏休み前、猟奇的で自傷的な感情に支配されていた頃の自分が懐かしく、遠い存在に思えてくる。

そのまま両手を経血に濡らしながら、催眠導入されるように呼吸を深めていく。

心の壁を剥がしていく。

リラックスしていく。

妊娠の危険が消え去ったことに心底ホッとしながら力を抜いていく。

深い深い呼吸。

あぁそうか――と私は脳裏で合点がいく。

クラスの性交経験者に感じるのはこの呼吸の深さ。

ちょっとした違いだけど、経験者はどことなく呼吸が深く、余裕を感じる。

少し大人びたような余裕がほのかに漂う。

クラスが下ネタに湧いた時なんか、それは顕著に表れる。

目を閉じる。

中出しに終わった解除されないままの催眠の世界を追う。

深い深い催眠の世界へ落ちていこうとする。

ゆっくり身体の力を抜いていく。

すとんと両手が落ち、たぶん両手に付いた経血が部屋を汚してしまったかもしれないけれど、そんな些細なことなど気にしない。

心地良い世界へ。

優しい世界へ。

なにも恐れることのない世界へ。

「……あれ？」

目を開く。

おかしい、全然催眠の世界に落ちていけない。

催眠世界で感じていた浮遊感や万能感が湧いてこない。

やたら高級なオーディオシステムを組んで、真空管を茜に染めて、そこに繋いだヘッドフォンを被らないとダメなのだろうか？

そんなことない。

心を静めて、身体の力を抜いて、呼吸を深めていけば――

「ダメだ……」

まるで催眠の世界への扉が固く閉じられたように。

ううん、どこでも奈落へ落ちていけるような感覚の果てに、ついに奈落の底に着いてしまったかのようだった。

楽しい楽しい遊園地が閉園時間を迎えて門を閉めるように、長い長い夏休みがやがて終わるように、いつか子供が大人になるように。

「雅人さん、中に出したことにばっかり気を取られて、催眠を解除してくれなかったからよ」

だから私は催眠の世界の底に辿り着いてしまった――という意味の怨み節をつぶやく私だったけれど、その実、心は晴れやかだった。

なにかを諦めるようにゆっくり息を吐き、なにかを受け入れるようにゆっくり息を吸う。

心は解れ、心地良く、優しくなっていく。

手についた生理による経血は、元は鮮やかな赤であったろうに、世間の穢れを吸い込んだようにどす黒い色をしている。

きっと誰かへと繋がっていると願いたい赤い糸が結ばれている小指を、私はぺろっと舐めてみた。

「苦い……」

当たり前の血の味に、夏が過ぎていくような自然さで催眠が解けていくような気がした。

――終わり――

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n0241dd/

高校デビューに失敗した傷心少女の心に催眠を掛けて種付けセックスしてあげました！

2024年5月17日22時37分発行